長崎県文化財調査報告書第142集

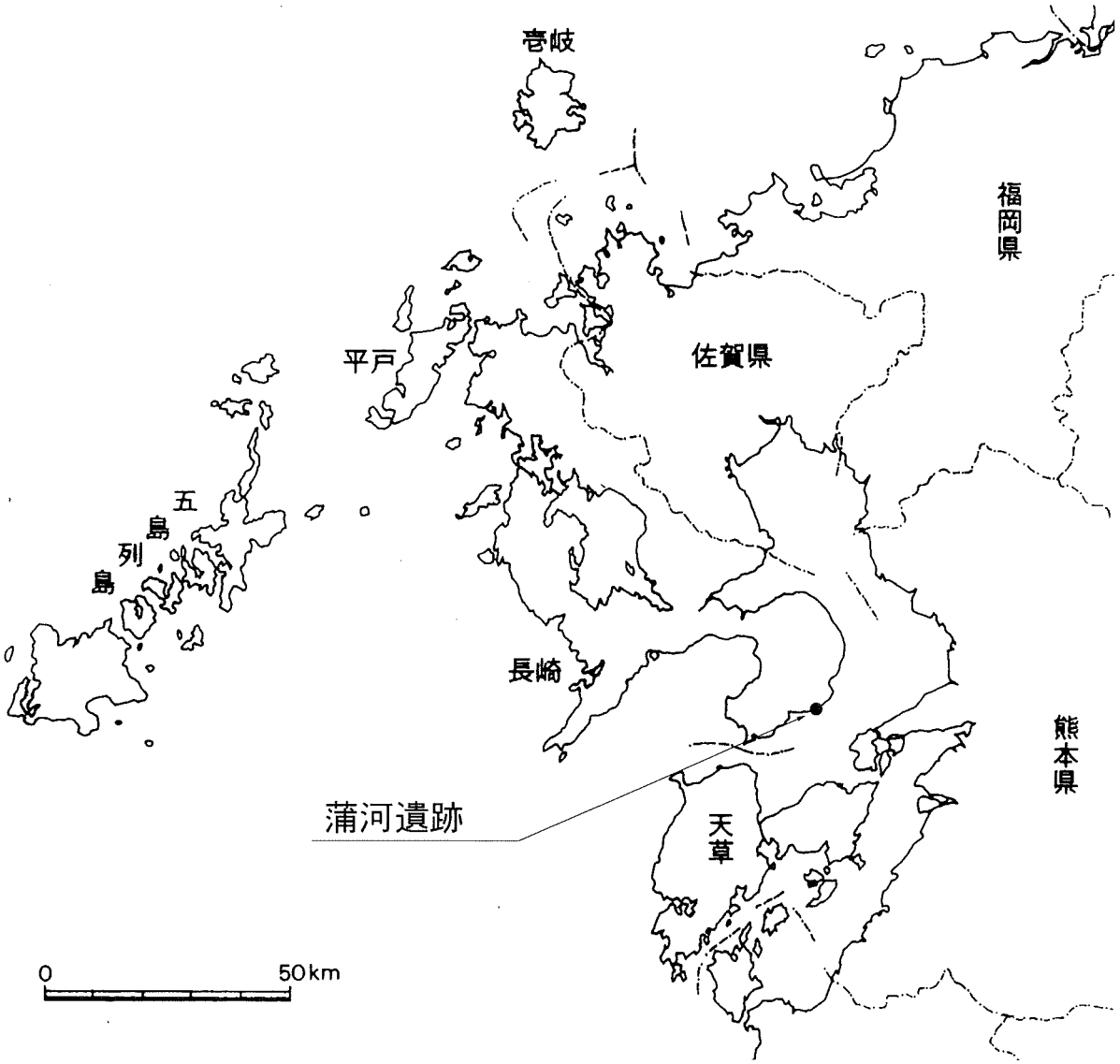
# 蒲　河　遺　跡

1 9 9 8

長 崎 県 教 育 委 員 会

長崎県文化財調査報告書第142集

# 蒲　河　遺　跡



# 発刊にあたって

本書は、長崎県教育委員会が蒲河小川地区海岸環境保全事業に伴い実施した、蒲河遺跡の発掘調査報告書です。

蒲河遺跡は潮間帯に立地する遺跡で、昭和56年同じく潮間帯に立地する堂崎遺跡の発掘調査の時に礫器や縄文土器が発見され知られるようになりました。

今回の発掘調査は、遺跡の立地上、干潮時にしか調査ができず困難な面もありましたが、多数の礫器と輸入陶磁器や国産陶磁器片などが出土し、縄文時代晩期から中世に至る島原半島南部の海岸部での人々のようすを明らかにするための資料を得ることができました。

最後に、この報告書が文化財に対する理解と愛護を深める一助となり、学術研究の資料として役立つことを念じて発刊のあいさつとさせていただきます。

平成10年３月

長崎県教育委員会教育長　中　川　　忠

# 例　　言

1．本書は，平成９年度に実施した長崎県南高来郡有家町蒲河名ほかに所在する蒲河遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．調査は，蒲河小川地区海岸環境整備工事事業に伴い５月６日～６月４日の期間で実施した。

3．調査は，長崎県島原振興局の依頼をうけ，長崎県教育庁文化課が担当した。

4．調査の関係者は次の通りである。

調査担当

長崎県教育庁文化課　文化財保護主事　福田　一志

文化財保護主事　甲斐田　彰

調査協力

長崎県教育庁島原教育事務所　社会教育主事（有家町派遣）　林　興一郎

5．本書は福田一志、甲斐田彰が分担執筆し、各項の執筆者は本文目次に記した。

6．本書関係の写真撮影は、調査中のものは福田が担当し、遺物については大平由里子が担当した。

7．本書関係の出土遺物と図面および写真は、長崎県教育庁文化課立山分室に保管している。

8．本書の編集は甲斐田による。

# 本　文　目　次

Ⅰ　地理的歴史的環境 …… 1（甲斐田）

1．地理的環境 …… 1（　〃　）

2．歴史的環境 …… 4（　〃　）

Ⅱ　調査に至る経緯 …… 6（甲斐田）

Ⅲ　調　査 …… 7（甲斐田）

1．調査の概要 …… 7（　〃　）

2．土層 …… 8（　〃　）

Ⅳ　遺　物 …… 9（甲斐田）

1．土器・陶磁器 …… 9（　〃　）

2．石器 …… 11（福　田）

Ⅴ　まとめ …… 20（甲斐田）

# 挿　図　目　次

第１図　有家町地形分類図［1:75,000］…… 1
第２図　有家町遺跡分布図［1:35,000］…… 2
第３図　採集された土器実測図［S＝1/3］…… 6
第４図　遺跡周辺図［1:21,000］…… 6
第５図　調査区域図［1:750］…… 7
第６図　試掘坑配置図［1:1,800］…… 7
第７図　土層断面図［S＝1/25］…… 8
第８図　土器・陶磁器実測図①［S＝1/2］…… 9
第９図　礫器の形態分類 …… 11
第10図　石器実測図①［S＝1/3］…… 13
第11図　石器実測図②［S＝1/3］…… 14
第12図　石器実測図③［S＝1/3］…… 15
第13図　石器実測図④［S＝1/3］…… 16
第14図　石器実測図⑤［S＝1/3］…… 17
第15図　石器実測図⑥［S＝1/3］…… 18

# 表　目　次

第１表　有家町遺跡一覧表 …… 3
第２表　礫器の重量と個体数 …… 18
第３表　蒲河遺跡出土石器一覧表 …… 19

# 図　版　目　次

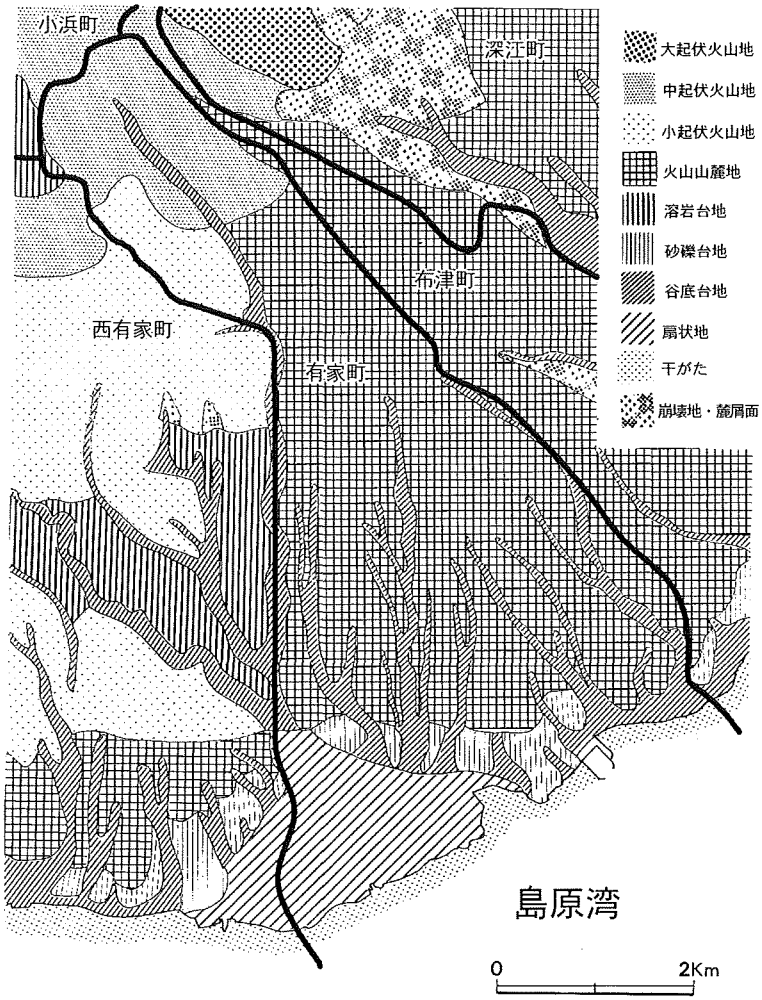
図版１　調査状況① …… 23
図版２　調査状況② …… 24
図版３　礫器 …… 25
図版４　礫器 …… 26
図版５　礫器 …… 27
図版６　礫器 …… 28
図版７　礫器 …… 29
図版８　礫器，土器・陶磁器 …… 30

# Ⅰ　地理的歴史的環境

## 1．地理的環境

有家町は、長崎県の東に突き出た島原半島の南東部に位置し、北緯32°38′50″～32°43′50″、東経130°16′20″～130°20′50″の範囲にある。雲仙岳南部を頂点とし、その南麓にほぼ扇形状をなし、緩やかな傾斜を持って海岸部に至る。東は布津町、西は有家川を挟んで西有家町、北は小浜町と接し、南は島原湾に面している。東西4.1km、南北8.5km、面積23.31km²、最高地点は標高786ｍである。人口は世帯数2,672世帯（H8.10.1）、総数9,552人（H8.10.1）で島原半島南部では最も多いが減少傾向にあり、人口密度は411.5人／km²で県全体の377.7人／km²より多い。

地勢は典型的は北高南低をなす。町北部は高岩山中起伏火山地となっている。この火丘群は現在の雲仙火山が形成された一連の火山活動のうち、最初の活動によって出現したものである。地質的には角閃石安山岩であり、大部分が針葉樹林地帯となっている。町中央部は有家山麓地と呼ばれる火山山麓地（火山性山麓扇状地）である。この地域は前記の火山活動の前の噴火によって形成された富士山型の巨大な成層火山の裾野部分にあたる（註１）。表層地質は雲仙火山基底火山砕屑岩あるいは竜谷層と呼ばれ基盤の口之津層群を覆って堆積している。町の半分以上の面積を占め、主に畑地として利用され、集落も点在する。この火山山麓地を浸食して幾筋もの河川が流れている。標高約200ｍ付近からはその両側に谷底低地が形成され水田となっている。また、火山山麓地の末端部には砂礫段丘が形成されている。ここは、石田海岸段丘と呼ばれ20ｍ前後の平坦地となっており、畑地として利用されている。海岸部は西部は扇状地、東部は谷底低地からつづく海岸低地となっている。西部の有家川下流域の扇状地は傾斜３°以下の低地で、安山岩の新規堆積物からなる。扇頂部分は役場や駅がある町の中心地で、扇央部分には水田や畑地が広が




第１図　有家町地形分類図［１:75,000］

蒲河遺跡

第２図　有家町遺跡分布図［１:35,000］

| 県番号 | 遺跡名 | 種別 | 立地 | 標高(m) | 旧石器 | 縄文 | 弥生 | 古墳 | 古代 | 中世 | 近世 | 出土遺物・文献等 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 羅漢寺跡 | 寺跡 | 山地 | 300 | | | | | | ○ | | 石像〈文献①〉 |
| 2 | 東大窪遺跡 | 遺物包含地 | 山麓地 | 250 | | ○ | | | | | | 石斧 |
| 3 | 上堀切遺跡 | 遺物包含地 | 山麓地 | 210 | | ○ | | | | | | |
| 4 | 三又遺跡 | 遺物包含地 | 山麓地 | 240 | | ○ | | | | | | 土器片〈文献①・②〉 |
| 5 | 百貫石遺跡 | 遺物包含地 | 山麓地 | 190 | | ○ | | | | | | 石斧 |
| 6 | 藤原・中水谷遺跡 | 遺物包含地 | 山麓地 | 150 | | ○ | | | | | | 西平式系土器・鍬形土器・磨製石斧・打製石斧〈文献②〉 |
| 7 | 北通野古墳 | 古墳 | 山麓地 | 50 | | | | ○ | | | | 土師器・須恵器・鉄鏃・ガラス小玉〈文献①・②〉 |
| 8 | 高原遺跡 | 遺物包含地 | 山麓地 | 50 | | | ○ | ○ | | | | 弥生土器・砂岩製磨製石斧〈文献②〉 |
| 10 | 踏鞴坂遺跡 | 製鉄跡 | 山麓地 | 48 | | | | | | ○ | ○ | 〈文献①・②〉 |
| 11 | 大平古墳 | 古墳 | 山麓地 | 27 | | | | ○ | | | | 須恵器・人骨　横穴式石室〈文献②〉 |
| 12 | 称名寺古墳 | 古墳 | 山麓地 | 18 | | | | ○ | | | | 金環・円墳・横穴式石室 |
| 13 | 陣の内キリシタン墓碑 | キリシタン墓碑 | 山麓地 | 26 | | | | | | | ○ | 〈文献①・②〉 |
| 14 | 青龍寺跡 | 寺跡 | 山麓地 | 26 | | | | | | ○ | | 〈文献①〉 |
| 15 | 大苑城跡 | 城跡 | 低地 | 22 | | | | | | ○ | | 〈文献①・②〉 |
| 16 | 貝森遺跡 | 遺物包含地 | 海底 | 0 | | ○ | ○ | | | | | 轟式・並木式・山の寺式土器、弥生土器・石斧・双角状礫器〈文献①・②〉 |
| 17 | 鳥辻の保塁 | 城跡 | 低地 | 22 | | | | ○ | | | | 〈文献①・②〉 |
| 18 | 堂崎城跡 | 城跡 | 低地 | 24 | | | | | | ○ | | 〈文献①・②・⑤〉 |
| 20 | 東塩屋遺跡 | 遺物包含地 | 低地 | 18 | | ○ | | | | | | 土偶・打製石斧〈文献①・②〉 |
| 21 | 堂崎遺跡 | 遺物包含地 | 海底 | 0 | | ○ | ○ | ○ | | | | 縄文土器・礫器・石錘・石錐・石匙・石斧、弥生土器、土師器・須恵器〈文献③・⑥〉 |
| 22 | 石田遺跡 | 遺物包含地 | 海底 | 0 | | ○ | | | | | | 土器・礫器・石錘〈文献③〉 |
| 23 | 鍛冶屋敷遺跡 | 製鉄跡 | 山麓地 | 45 | | | | | | ○ | ○ | 〈文献①・②〉 |
| 24 | 西鬼塚支石墓・石棺群 | 墳墓 | 山麓地 | 60 | | ○ | ○ | ○ | | | | 刻目凸帯文土器・スクレイパー・十字形石器・砥石・石錘〈文献②・④〉 |
| 25 | 穴之元遺跡 | 製鉄跡 | 山麓地 | 68 | | | | | | ○ | ○ | 〈文献①・②〉 |
| 26 | 中三条遺跡 | 遺物包含地 | 山麓地 | 100 | | ○ | | | | | | 〈文献②〉 |
| 27 | 妙香古墳 | 古墳 | 山麓地 | 78 | | | | ○ | | ○ | | 〈文献②〉 |
| 28 | 長正寺跡 | 寺跡 | 山麓地 | 82 | | | | | | ○ | | 〈文献①〉 |
| 31 | 有家町尾上のキリシタン墓碑 | キリシタン墓碑 | 山麓地 | 72 | | | | | | | ○ | 銘有・平型〈文献①・②〉県指定史跡 |
| 33 | 祥岳禎公禅師碑 | 石造物 | 山麓地 | 60 | | | | | | | ○ | 銘有〈文献①・②〉 |
| 34 | 金剛院跡 | 寺跡 | 山麓地 | 66 | | | | | | ○ | | 〈文献①〉 |
| 37 | 長田キリシタン墓碑 | キリシタン墓碑 | 山麓地 | 47 | | | | | | | ○ | 無銘・蒲鉾型〈文献①・②〉 |
| 38 | 裏谷遺跡 | 製鉄跡 | 山麓地 | 46 | | | | | | ○ | ○ | 〈文献①・②〉 |
| 40 | 今城跡 | 城跡 | 台地 | 30 | | | | | | ○ | | 〈文献⑤〉 |
| 41 | 下鬼塚石棺群 | 墳墓 | 台地 | 36 | | | ○ | ○ | | | | 〈文献①・②〉 |
| 42 | 下鬼塚遺跡 | 石造物 | 山麓地 | 34 | | | | | | ○ | | 滑石製埋納容器〈文献①・②〉 |
| 43 | 前田古墳群 | 古墳 | 台地 | 22 | | | | ○ | | | | 〈文献①・②〉 |
| 45 | 大善寺跡 | 寺跡 | 台地 | 40 | | | | | | ○ | | 〈文献①〉 |
| 46 | 銭谷キリシタン墓碑 | キリシタン墓碑 | 山麓地 | 40 | | | | | | | ○ | 無銘〈文献①・②〉 |
| 47 | 力野キリシタン墓碑 | キリシタン墓碑 | 山麓地 | 38 | | | | | | | ○ | 干十字平型・花十字平型〈文献①・②〉県指定史跡 |
| 48 | 久保遺跡 | 遺物包含地 | 扇状地 | 30 | | ○ | | | | | | 石斧 |
| 51 | 堤遺跡 | 遺物包含地 | 扇状地 | 26 | | | ○ | | | | | 合口甕棺・土器・貝製装飾品 |
| 52 | 馬場紀伊入道の板碑 | 石造物 | 扇状地 | 21 | | | | | | ○ | | 〈文献①・②〉 |
| 53 | 町村遺跡 | 遺物包含地 | 扇状地 | 19 | | | ○ | ○ | | | | 〈文献①・②〉 |
| 54 | 有家セミナリオ跡 | 教会跡 | 扇状地 | 15 | | | | | | ○ | ○ | 〈文献①・②〉 |
| 55 | 有家町中須川のキリシタン墓碑 | キリシタン墓碑 | 扇状地 | 15 | | | | | | | ○ | 〈文献①・②〉県指定史跡 |
| 56 | 那堤大明神キリシタン墓碑 | キリシタン墓碑 | 扇状地 | 13 | | | | | | | ○ | 無銘〈文献①・②〉 |
| 57 | 汐塚古墳 | 古墳 | 扇状地 | 13 | | | | ○ | | | | 〈文献①・②〉 |
| 58 | 白崎遺跡 | 遺物包含地 | 扇状地 | 14 | | ○ | | | | | | 土器・石斧〈文献②〉 |
| 60 | フケタ遺跡 | 遺物包含地 | 扇状地 | 7 | | | ○ | ○ | | | | 〈文献①・②〉 |
| 61 | 榎田キリシタン墓碑 | キリシタン墓碑 | 扇状地 | 8 | | | | | | | ○ | 花十字浮彫箱型　県指定史跡 |
| **62** | **蒲河遺跡** | 遺物包含地 | 海底 | 0 | | ○ | | | | | | 縄文晩期土器・礫器〈文献③〉 |
| 63 | 下六郎木キリシタン墓碑 | キリシタン墓碑 | 山麓地 | 90 | | | | | | | ○ | |
| 64 | 中山キリシタン墓碑 | キリシタン墓碑 | 山麓地 | 95 | | | | | | | ○ | |
| 65 | 東田原遺跡 | 遺物包含地 | 山麓地 | 72 | | | ○ | | | | | 土器・磨石 |
| 66 | 東木場遺跡 | 遺物包含地 | 山麓地 | 86 | | | ○ | | | | | 土器 |
| 67 | 熊野石人 | 石造物 | 扇状地 | 10 | | | | ○ | | | | 〈文献①・②〉 |
| 68 | 下木場遺跡 | 遺物包含地 | 山麓地 | 65 | | | ○ | | | | | 磨石 |
| 69 | 野中遺跡 | 遺物包含地 | 山麓地 | 70 | | | ○ | | | | | 土器 |

第1表　有家町遺跡一覧表（註2）

る。東部の海岸低地部分は鉄道沿いに住宅地区となっている。海岸線は人工海岸でない部分はすべて砂礫浜海岸となっている。

本町の海岸部は干満の差が激しく、人工海岸でない部分は200～300mの干がたができる。蒲河遺跡は有家川下流扇状地南岸の干がた部分に立地し、標高は－３～＋２mの範囲である。表層地質は砂礫堆積物で砂がベースで数cm～数十cmの礫が混じる。干がた部分はほとんど遺跡の範囲とされており、東から堂崎遺跡、石田遺跡そして蒲河遺跡となる。

## ２．歴史的環境

有家町にある周知の遺跡の数は57遺跡である（H10.3.31）。県全体に占める面積の割合が0.56％であるのに対し、遺跡数の割合は1.62％と３倍近く、遺跡密度はかなり高いといえる。時代別では旧石器０、縄文14、弥生12、古墳14、古代０、中世16、近世16（延べ数）となっている。

旧石器時代の遺跡は本町では見つかっていない。島原半島の北部には百花台遺跡をはじめ重要な旧石器時代の遺跡群が所在するが、南部には希薄である。本町周辺の旧石器時代の遺跡としては、西有家町の風呂川遺跡、北有馬町の今福遺跡があげられるが、時代の主体は前者が縄文時代晩期、後者が弥生時代中期～古墳時代初期と中世である。

縄文時代の遺跡は火山山麓地の標高100～250mの付近と標高30m以下の低地および干がた部分に集中し、縄文時代晩期を主体とする遺跡が多い。これは島原半島全体の傾向である「晩期では低地と200mラインとの両極立地を見せる。」（久原1994）と一致する。発掘調査が実施された遺跡としては、堂崎遺跡（**21**）と西鬼塚支石墓・石棺群（**24**）がある。堂崎遺跡は1980・1981（昭和55・56）年に長崎県教育委員会によって発掘調査が実施され、縄文時代晩期を主体とする土器や礫器200点以上・石錘128点などが出土した。西鬼塚支石墓・石棺群は1974（昭和49）年に古田正隆氏により調査された際は古墳として紹介されたが、1992・1994・1995（平成４・６・７）年に有家町教育委員会の要請で県文化課が実施した発掘調査により、支石墓１基・石棺墓５基が検出され、縄文時代晩期の刻目突帯文土器や十字形石器が出土し、時代の主体が縄文時代であることが確認された。

弥生時代の遺跡は有家山麓地の下部、標高50～100mの付近に多く分布する。1995（平成７）年に発見された町東部の一群以外は古墳以外の古墳時代との複合遺跡が多い。弥生時代を主体とする遺跡は現在のところ希薄であるといえよう。

古墳時代の遺跡のうち６遺跡が古墳である。有家山麓地端部、標高50m以下に多く分布する。大平古墳（**11**）と妙香古墳（**27**）は1979（昭和54）年、有家町史跡調査委員会により調査され、横穴式石室であることは確認されたが、墳丘も崩壊しており、遺物もほとんど出土しなかった。

古代の遺跡は本町では確認されていない。古代の遺跡は県全体でも希薄であるが、島原半島北部では条里遺構や太宰府系「老司Ⅰ式」の古瓦が出土し寺院跡と推定されている五万長者遺跡が所在する。しかし南部では遺物包含層が確認され肥最埼警護所と関連した対外的な防御も兼ねた要所的な基地（宮崎1989）あるいは製塩関係遺構が存在する遺跡（寺田1995）として可能性が示唆されている国崎

遺跡と前述の今福遺跡で遺物が出土している程度で古代を主体とする遺跡は少ない。

中世の遺跡は有家町山麓地端部付近に分布する。城跡や寺跡といった建物跡が多いが、製鉄跡が4遺跡もあることは注目される。

近世の遺跡は有家川扇状地に多く分布する。キリシタン墓碑、教会跡といったキリシタン関係の遺跡が11遺跡もあることは、中世末から近世初頭にかけてキリスト教が盛んであったこの地の歴史的特性をよく表している。

遺跡は全般的に新しい時代になるほど海岸部近くに立地しており、「遺跡立地の趨勢が時代を経るごとに低地へ向かう」（久原1994）島原半島全体の傾向と一致している。また、中近世の遺跡が23遺跡で、遺跡全体の40.3％と多くを占めているのも本町の特徴といえる。

［註］

註1　太田一也は（太田1984）「この活動によって最初に形成された火山帯は、ほぼ円錐形をした富士山型の巨大な成層火山であったに違いない。」と述べると同時に「これだけ大量の火山砕屑物が短い間に放出されたとしたら、噴出地点一帯では、地下深部に空洞を生じてある程度の地盤の沈降はさけられなかったものと思われ、果たして巨大な〝雲仙富士〟が実在していたかどうかは疑わしく、形成されたとしても、短命に終わったかもしれない。」と疑問も持っている。

註2　番号の9，19，29，30，32，35，36，39，44，49，50，59については、遺跡とは認められないため1994『長崎県遺跡地図』長崎県文化財調査報告書第111集から削除されているため、本表でもそれに準じた。

［参考文献］（第1表の文献は除く）

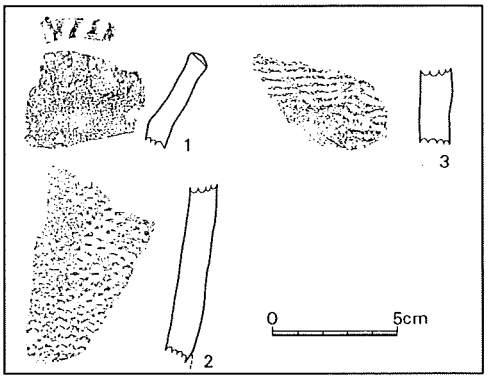
長崎県企画部統計課編 1997『平成8年度版 長崎県勢要覧』長崎県企画部統計課
長崎県総務部地方課編 1997『長崎県市町村便覧（平成8年度版）』長崎県市町村便覧
長崎県企画部統計課編 1997『平成9年（第44版）長崎県統計年鑑』長崎県企画部統計課
長崎県土地対策室 1976『離島振興開発地域土地分類基本調査　島原・荒尾』長崎県土地対策室
長崎県土地対策室 1983『離島振興開発地域土地分類基本調査　口之津・三角』長崎県土地対策室
長崎県教育委員会 1994『長崎県遺跡地図 －島原・南高来郡地区－』長崎県文化財調査報告書第111集 長崎県教育委員会
太田一也1984『雲仙火山』「雲仙の自然と歴史」長崎県
久原巻二1994「第2章　地理的歴史的環境」『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書第116集 長崎県教育委員会PP17～23
藤田和裕編1982『風呂川遺跡』西有家町文化財調査報告書第1集 西有家町教育委員会
宮崎貴夫編1984『今福遺跡』Ⅰ　長崎県文化財調査報告書第68集 長崎県教育委員会
宮崎貴夫編1985『今福遺跡』Ⅱ　長崎県文化財調査報告書第77集 長崎県教育委員会
宮崎貴夫・町田利幸編1986『今福遺跡』Ⅲ　長崎県文化財調査報告書第84集 長崎県教育委員会
川道寛1997「五万長者遺跡」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅴ』長崎県文化財調査報告書第133集 長崎県教育委員会
宮崎貴夫1989『国崎遺跡』南串山文化財調査報告書第2集 南串山町教育委員会
寺田正剛1995『国崎遺跡』Ⅱ　南串山文化財調査報告書第3集 南串山町教育委員会

［第1表の文献］

〈文献①〉 有家町郷土誌編纂委員会 1981『有家町郷土誌』有家町教育委員会
〈文献②〉 古田正隆 1980『有家町内における文化財の分布調査』有家町の文化財報告第1集 有家町教育委員会
〈文献③〉 安楽勉 1982『堂崎遺跡』長崎県文化財調査報告書第58集 長崎県教育委員会
〈文献④〉 村川逸朗 1997『西鬼塚支石墓・石棺群』有家町埋蔵文化財調査報告書第3集 有家町教育委員会
〈文献⑤〉 吉田安弘 1980「今城」『日本城郭大系 第17巻 長崎・佐賀』新人物往来社
〈文献⑥〉 荒木伸也 1997「有家堂崎遺跡」『原始古代の長崎県 資料編Ⅱ』長崎県教育委員会

# Ⅱ　調査に至る経緯

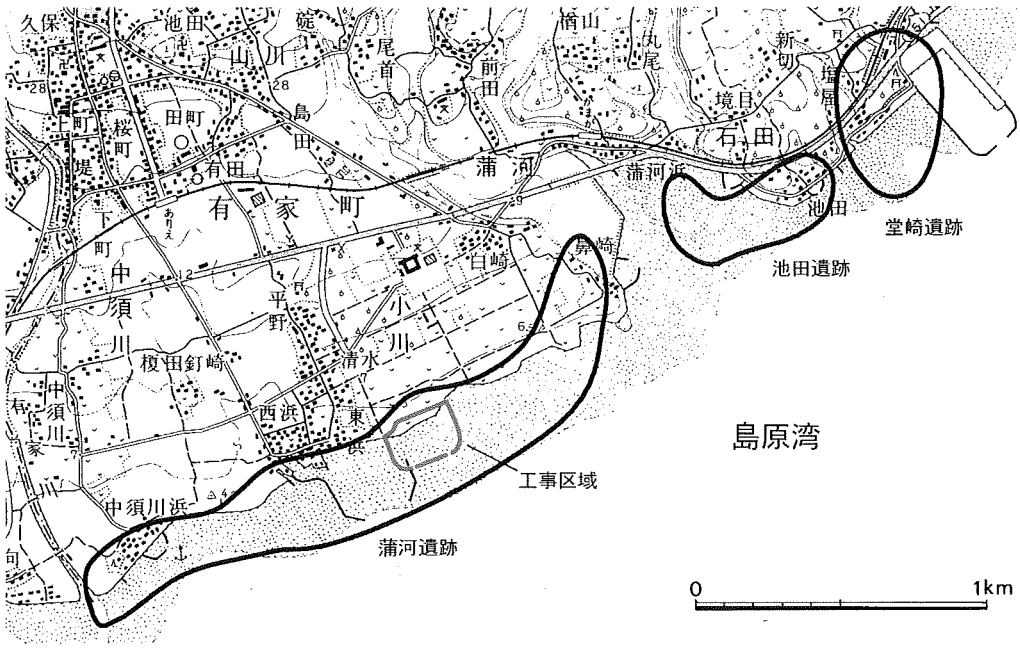
1980・1981（昭和55・56）年、地方港湾堂崎港港湾整備５カ年計画の工事に伴い堂崎遺跡発掘調査が長崎県教育委員会により実施された。調査の際、堂崎遺跡と地形が類似している西側の干がた部分も踏査が行われ縄文土器や礫器が散在していることが確認された。この時採集された遺物と遺跡の位置が1982（昭和57）年同遺跡の調査報告書で紹介され本遺跡が周知されるようになった。ただし、この時蒲河遺跡と認識された範囲は、現在では池田遺跡の西側部分となっている。1983（昭和58）年長崎県教育委員会により現地踏査が行われ、現在の蒲河遺跡の範囲が確定した。



第３図　採集された土器実測図〔S＝1/3〕

今回の調査の発端は、長崎県島原振興局により平成６年から５カ年計画で工事が計画された蒲河小川地区海岸環境整備事業の施工箇所が、蒲河遺跡の範囲内に含まれていたことによる。そこで平成５年、分布調査を実施した結果、範囲確認調査の必要性が確認された。

これを受け平成６年８月29日～９月22日の期間で範囲確認調査が実施された。調査区は工事予定区全域として25×25mのメッシュに区切り、基本的に50mごとおよび遺物の出土状況に合わせて任意に３×３mの試掘坑を20箇所設定した。調査の結果、遺物は礫器を中心に石斧・石鏃・石匙・土器片・中世陶磁器などが調査区全域から採集されたが、遺物包含層が確認されたのは調査区東側部分の第12・13・18試掘坑の３箇所のみであった。しかし、この部分は工事計画では東側防波堤付近にあたっていた。そこで、関係機関での協議を行った結果、設計変更は困難であるということで、今回の緊急発掘調査を実施し記録保存をすることとなった。



第４図　遺跡周辺図〔1:21,000〕

# Ⅲ　調　　査

## 1．調査の概要

調査期間は平成９年５月６日～６月４日の期間で実施された。本遺跡は範囲確認調査で包含層が確認された東側防波堤建設地部分に調査区を設定した。調査区は西から東へＡ～Ｃ、北から南へ１～７とした。調査可能な時間が干潮時の１日４時間ほどしかなく、１回の調査でそのグリッドを完掘しなければならず時間的な制約の中、かなり変則的な調査形態となった。

遺物は縄文時代から近世のものまで存在するが、すべて第１層からの出土であり極わずかであった。以下は遺物の出土したグリッドである。

Ａ４グリッド　白磁（７）、青磁（８）

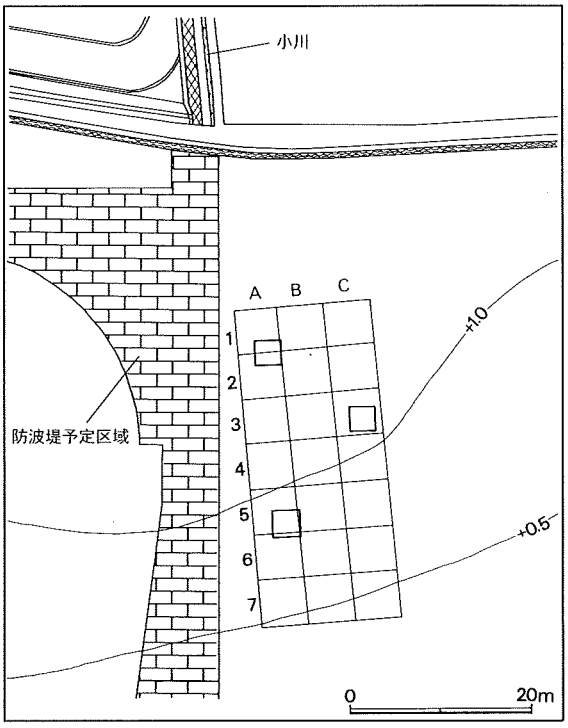
Ａ６グリッド　単角状礫器（５）

Ｂ３グリッド　縄文土器（１）、近世陶器（11）
　　単角状礫器（18）

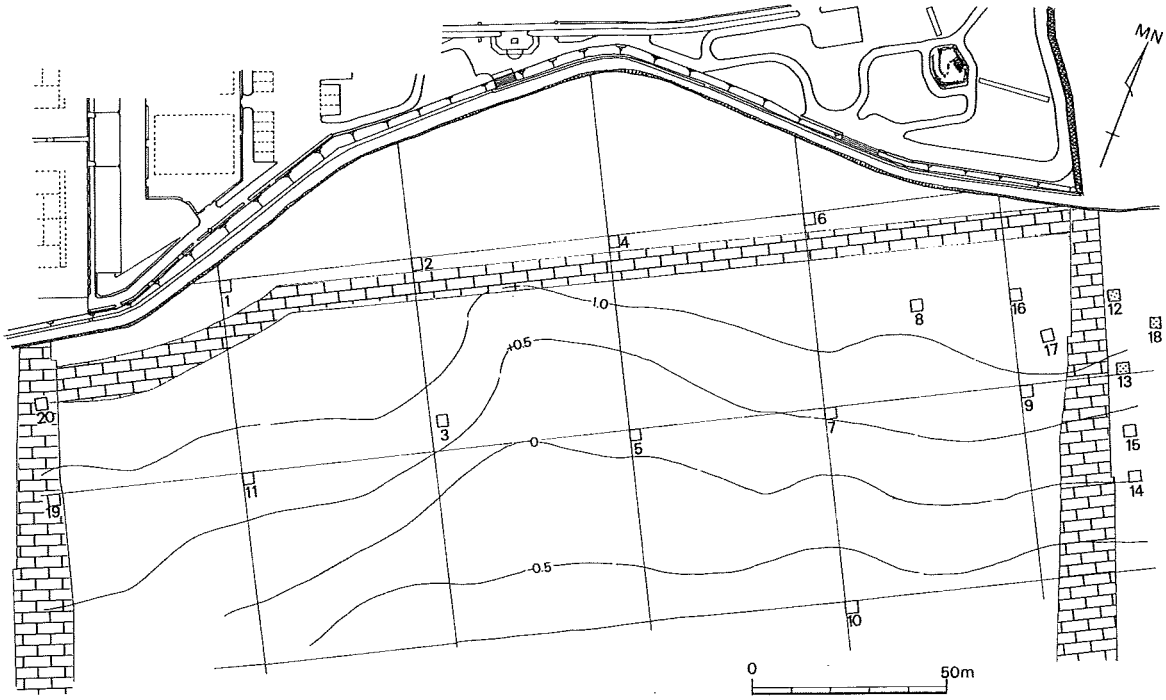
Ｂ５グリッド　弥生土器（２）、羽釜（５）

また、調査区周辺には礫器等の石器が多く散在していた。

遺構は検出されなかった。




第５図　調査区域図〔１:750〕




第６図　試掘坑配置図〔S＝１:1,800〕

## 2．土層

土層は基本的にすべて砂礫堆積層である。堆積物の違いから６層に分類した。今回の調査では明確に包含層と断定できる層は確認できなかった。

第１層　灰褐色砂層　　やや粒子の粗い砂層で上部は粉砕された貝殻を含み、下部より色調が明るい。この層の上を10cm前後の礫が覆っている。

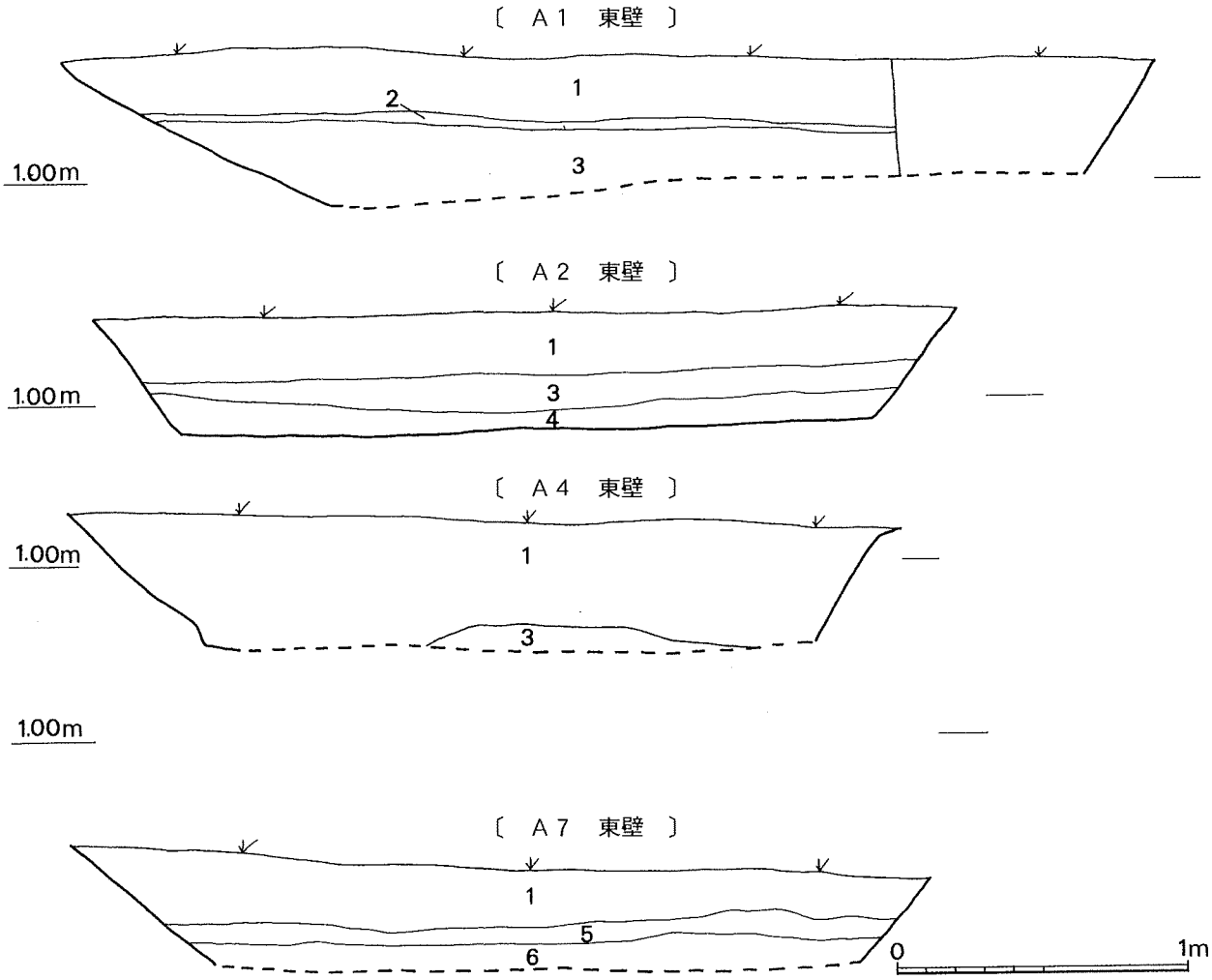
第２層　明茶褐色砂層　　２～３cmの厚さで堆積している。第１層との境界では植物繊維を多く含む。火山性の堆積物と思われ、砂の粒子は第１層より粗い。

第３層　暗黒色泥礫層　　黒色のガタ状の泥の中に多くの10cm前後の礫と、少量の粉砕された貝殻を含む。

第４層　暗灰色混土礫砂層　基本的に粒の粗い砂層であるがやや粘性を帯びている。少量の礫を含む。

第５層　明黄褐色砂礫層　　火山性の堆積物でガチガチに堅く締まっている。２～３cmの礫を多量に含む。

第６層　灰青色砂礫層　　粗い砂をベースとし、堅く締まっている。




第７図　土層断面図〔S＝1/25〕

# Ⅳ 遺　　物

## 1．土器・陶磁器（第8図）（註1）

今回の調査で土器・陶磁器類は表面採集分を含めても約30点出土したにすぎない。また、調査区内から出土したものも、すべて第1層からであった。遺物の時代は縄文時代晩期から近世に至る。

（1）縄文土器（1）

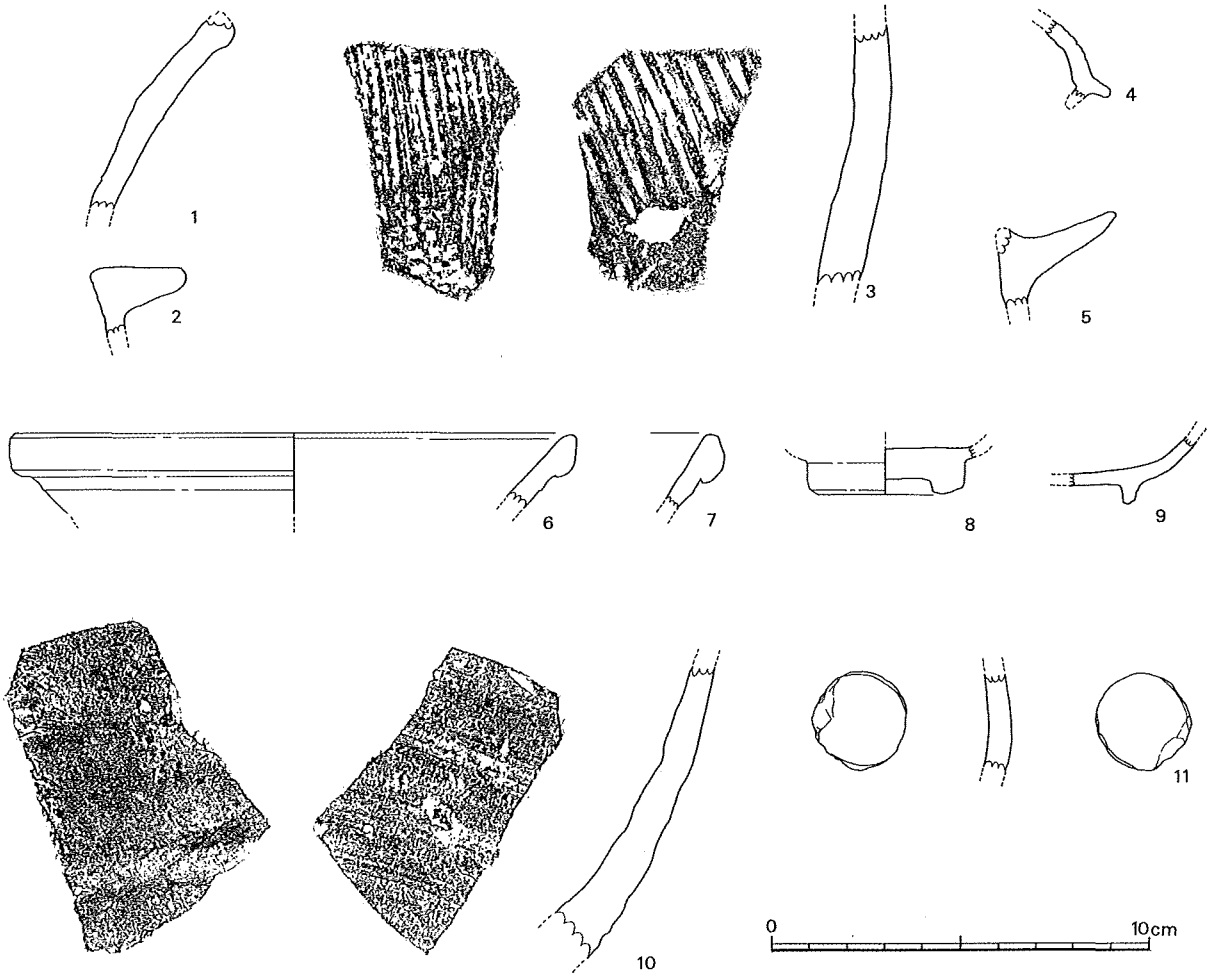
縄文時代晩期前葉の深鉢形土器の頸部である。色調は内外面ともに淡灰褐色で、胎土には角閃石が目立つ。器面調整は摩耗しているため不明である。焼成はやや軟調である。

（2）弥生土器（2）

弥生時代中期の肥後系甕形土器の口縁部である。色調は外面は淡灰褐色で内面はやや黒っぽい灰褐色である。胎土には角閃石・輝石を含む。全面にナデ調整が施されている。焼成は堅緻である。

（3）須恵器（3・4）

3は甕の胴部である。色調は内外面ともに緑灰色である。胎土はやや大粒の石英などの不純物を含み粗である。締まりも悪く気泡があり、焼成も不良である。4は6世紀～7世紀の坏の蓋と思われるが身の可能性もある。色調は青っぽい灰色で不純物は少ない。焼成は良好である。




第8図　土器・陶磁器実測図①〔S＝1/2〕

（4）瓦質土器（5）

羽釜の鍔の部分である。鍔は水平より上に伸び、下面にはすすが付着している。色調は内面は淡灰褐色で外面は灰褐色である。胎土は微細な石英粒が含まれ粗である。内面に指押さえの痕跡が確認できる。焼成は普通である。

（5）白磁（6・7・9）

6・7は大きな玉縁口縁を有する白磁碗Ⅳ類（註2）の口縁部で12世紀の資料である。6は色調は釉がやや青っぽい灰白色、素地は灰白色で、胎土は断面に若干の小さな気泡による間隙がみられるが緻密である。7は色調は釉が暗灰色、素地は灰白色で、胎土は6に比べるとやや粗い。内面にピンホールが多くざらざらしている。9は高台付端反白磁皿C群（註3）の底部で16世紀の資料である。高台部は内傾し断面は三角形に厚く削っている。畳付は釉はぎが施されている。色調は釉も素地も灰白色で、胎土は緻密である。

（6）青磁（8）

青磁碗の高台部分である。釉は高台外面までかかり畳付部分は削り取られ高台内は無釉である。高台は低く、高台径は4.1cmである。色調は釉は青みを帯びた緑灰色、素地は灰色で、胎土は若干の気泡がみられるが堅緻である。

（7）陶器（10・11）

10は無釉の陶器壺の胴部である。産地、時期は不明である。色調は暗赤褐色で、胎土は大粒の石英や小石を含み粗である。11は円盤状陶磁製品である。産地は不明であるが、近世陶器碗の胴部を利の透明釉がかかる。胎土は不純物の混入がなく、焼成も良好である。

［註］

註1　遺物の説明については、古門雅高氏、福田一志氏、渡邊康行氏に御教示いただいた。

註2　横田賢次郎・森田勉の分類による。

註3　小野正敏の分類による。

［参考文献］

小野正敏1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究NO.2』日本貿易陶磁研究会

横田賢次郎・森田勉1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心にして－」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館

上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究NO.2』日本貿易陶磁研究会

森田勉1982「15～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究NO.2』日本貿易陶磁研究会

宮崎貴夫1982『風呂川遺跡』西有家町文化財調査報告書第1集 西有家町教育委員会

宮崎貴夫編1984『今福遺跡』Ⅰ　長崎県文化財調査報告書第68集 長崎県教育委員会

宮崎貴夫編1985『今福遺跡』Ⅱ　長崎県文化財調査報告書第77集 長崎県教育委員会

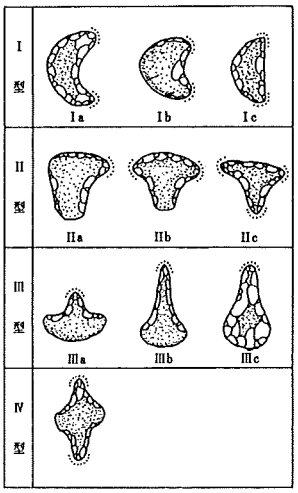
宮崎貴夫・町田利幸編1986『今福遺跡』Ⅲ　長崎県文化財調査報告書第84集 長崎県教育委員会

## 2．石器（第10図～15図）

縄文時代と弥生時代の土器については、縄文晩期土器の出土が１点と弥生時代中期の甕の口縁部片をみるだけであるが、石器についてもほとんど礫器で占められ、他は蛇紋岩製石斧１点と石錘が１点出土しているのみである。また、礫器のほとんどは調査区周辺の表採品であり、どの時期に帰属するかについては明確でないが、礫器の形状などは後述する堂崎遺跡に近い。礫器についての分類は、松藤により分類がなされており、ここではその分類に従い説明を加えていくこととする（松藤1987）。松藤分類では素材礫に「・・鈍い尖頭部を１～３カ所作り出した打製石器を４つに大別し、そのうちⅠ～Ⅲ型をさらに三亜型式に細分・・」している。第10図～15図に示した礫器は松藤分類の、一端を尖頭状に加工するⅢ型（1～24）の出土が多く、次に両端に尖頭部を設けたⅠ型（32～45）、またピック状の加工をするⅡ型（25・26・28・30・31）などがその主体となっている。Ⅰ型のなかでもⅠａ型「双角状石器」の出土はなく、Ⅰｂ型により近いものが出土しているが、胴部が長くいずれも三角形状を呈している。Ⅱ型についてはⅡａ型でほぼ統一される。特に扁平な方形状の角礫を加工し、手の平に丁度入ることが計算された作りとなっている。これらの礫器は、比較的小形であり遺跡の北側に近接する堂崎遺跡と形態的に類似する。遺物の拡がりなども考慮すれば時期的にも近似する可能性が高いと思われる。また、堂崎遺跡、本遺跡での特徴はⅠｃ型などの浅い抉りをもつものは出土しているが、Ⅰａ型が皆無であるということにつきるであろう。このような在り方は他に深堀遺跡、串島遺跡などの縄文時代の晩期の遺跡に類例がある。ただし、鹿児島県荘貝塚では轟式土器に、熊本県沖の原遺跡では縄文中期にⅠａ型の存在が知られるなど縄文時代を通じて出土するようであるが、長崎県の現在の状況を見てみると、先述したように縄文時代晩期から弥生時代になって多量に出土し始める一群として捉えられる。また礫器そのものについても縄文晩期～弥生時代の礫器群の出土量は他の時期の礫器の出土の在り方とは相違することから、貝類の採取という同じ用途であったとしても、それを必要とする社会的背景については大きく相違するものであったと思われる。

### 礫器の用途と形態分類

礫器という言葉そのものは、前期旧石器のチョッパー、チョッピングツールなどの石器の一般的な名称として使用されている。これをうけて縄文時代の石器などの一群についても礫器の名称が冠されるが、ここでは縄文時代晩期から弥生時代にかけて海岸部に集中してみられ、貝類の捕獲に使用されたと思われる一群について取り扱うこととする。この石器のなかの一部についてはその形態的特徴から双角状石器（古田1966）、靴型石器（江坂1968）などの名称で呼ばれ、特に有明海沿岸から天草諸島の沿岸部に多量に出土することが知られていた。この石器の用途については出土遺跡の立地などから古くから貝類の捕獲用の道具として捉えられており、現在においても用途については貝、特にカキなどを採取するものとして把握されている。有明海周辺の海岸は、干満の差が激しく、




（松藤1987より転載）

**第９図　礫器の形態分類**

干潮のときはかなり沖合まで陸化し、満潮のときは反対に海中に没する。このような立地環境は西北九州の海岸部では他に知られず、有明海周辺独自の環境と考えられる。このような環境にある有明海周辺の遺跡は、外洋性の漁業が発達する縄文後期においても遺跡の発達がみられないことからも、沿岸における貝の採取や簡易な網漁などの波打ち際での採集的漁業が営まれていたと考える。それを示すのが有明海周辺で多量に出土する礫器であろう。堂崎遺跡や筏遺跡で出土する石錘については先の網漁などが考えられよう。石錘と尖頭状礫器の関係については、賀川は深堀遺跡の報告のなかで「・・尖頭状礫器の出土する遺跡では石錘の出土が少なく、尖頭状礫器の出土を見ない後晩期の遺跡では、多量の石錘を出す」という知見をみているが、縄文晩期である堂崎遺跡ではこの限りではなく、今福遺跡や口之津貝塚などの弥生時代の遺跡においてはこのような状況が看取される。

**県内の礫器の形態分類について**

県内における礫器の形態分類を下記に示した。深堀遺跡の礫器の形態分類については、Ⅰ～Ⅳ型に分類されているが、松藤の分類とその基準そのものが相違するため、松藤分類をあてはめることはできない。串島遺跡ではⅠ・Ⅱ類については素材が円礫か扁平礫かでそれぞれａ類ｂ類に細分している。

今福遺跡の分類は、素材の長軸を加工するか短軸を加工するかで分類をし、Ⅰ型からⅣ型までに分類している。（　）内は松藤の分類にあてはめてみた。

賀川分類　深堀遺跡　　縄文晩期

Ⅰ型　礫の一端に加工を施し Chopper に類似

Ⅱ型　刃部が直線的

Ⅲ型　（尖頭状礫器）扁平な礫を利用して両面から加工された尖頭部をもつ。

Ⅳ型　厚みのある礫を素材として、加工が全面近くまでに及ぶ。鋭い尖頭部をもつ。

高野分類　串島遺跡　　縄文晩期

縄文晩期

Ⅰ類　（松藤Ⅲ型）礫のほぼ中央部に尖頭部をもつ。

Ⅱ類　（松藤Ⅰｂ型）２ヶ所以上に尖頭部をもち、同時に尖頭部に挟まれた凹形の弯曲した刃部をもつもの。

Ⅲ類　（松藤Ⅰｃ型）直線刃状のもの。

Ⅳ類　チョッパー、チョッピングツール状のもの。

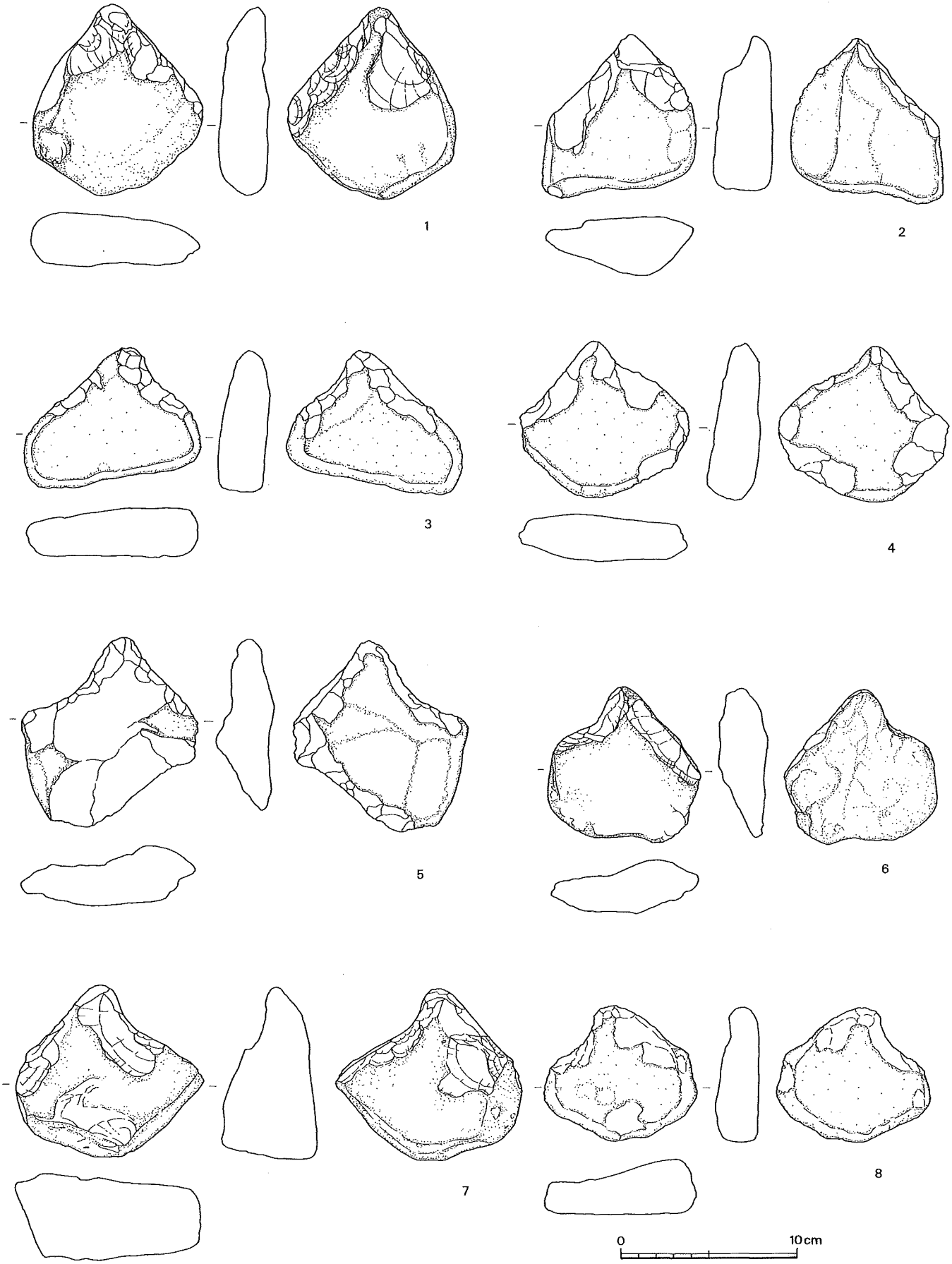
町田分類　今福遺跡　　弥生後期

Ⅰａ,b型　（松藤Ⅰa，Ⅰc型）素材の長軸を加工し、弯曲部を作り出すもの。

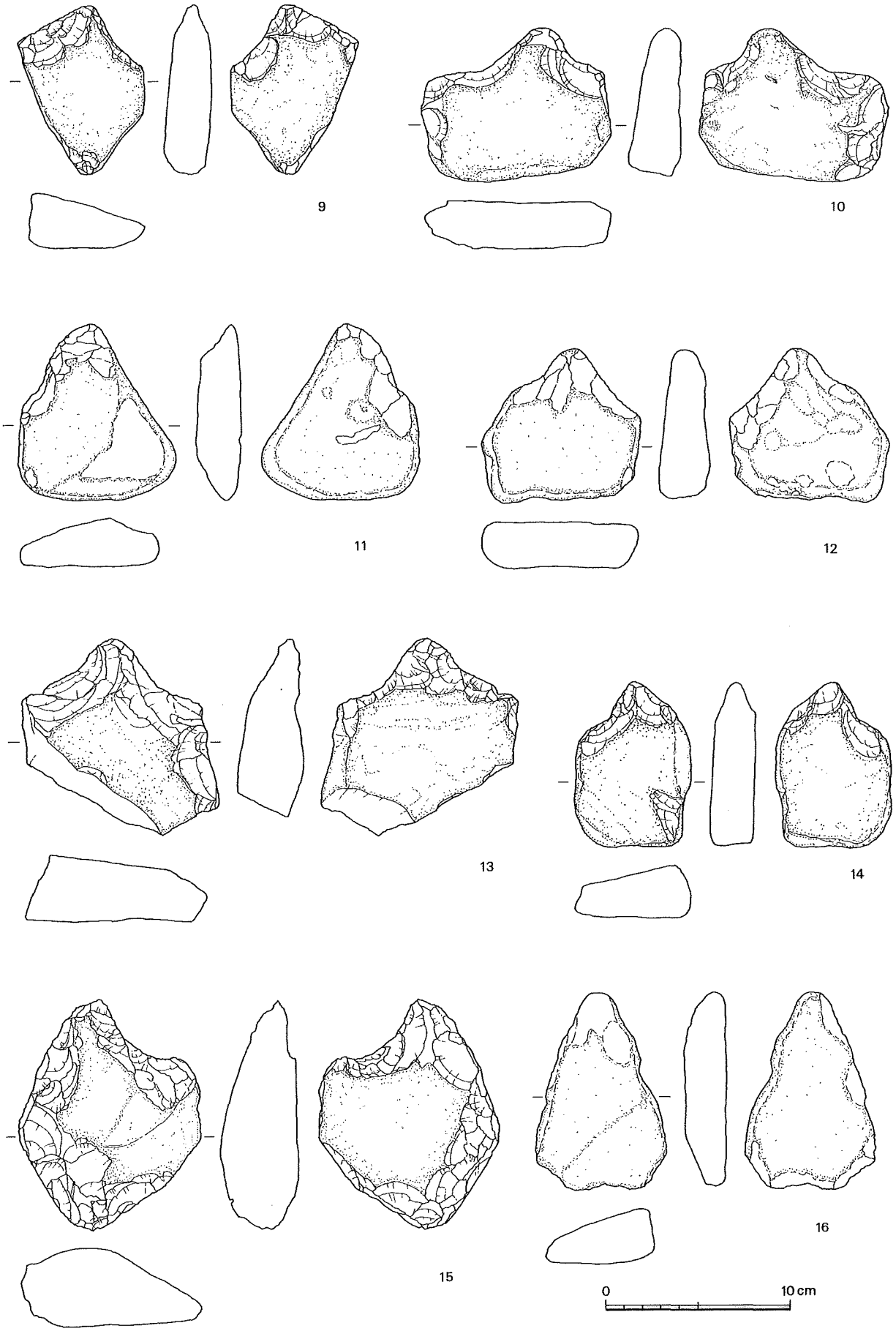
Ⅱa型　（松藤Ⅰb型）　素材の短軸部を加工し、弯曲部を作り出すもの。

Ⅲａ,b,c型（松藤Ⅲc,Ⅱa,Ⅳ型）素材の長軸を加工し、一ヶ所の尖頭部を作り出す。Ⅲｃ型は上下２ヶ所の尖頭部。

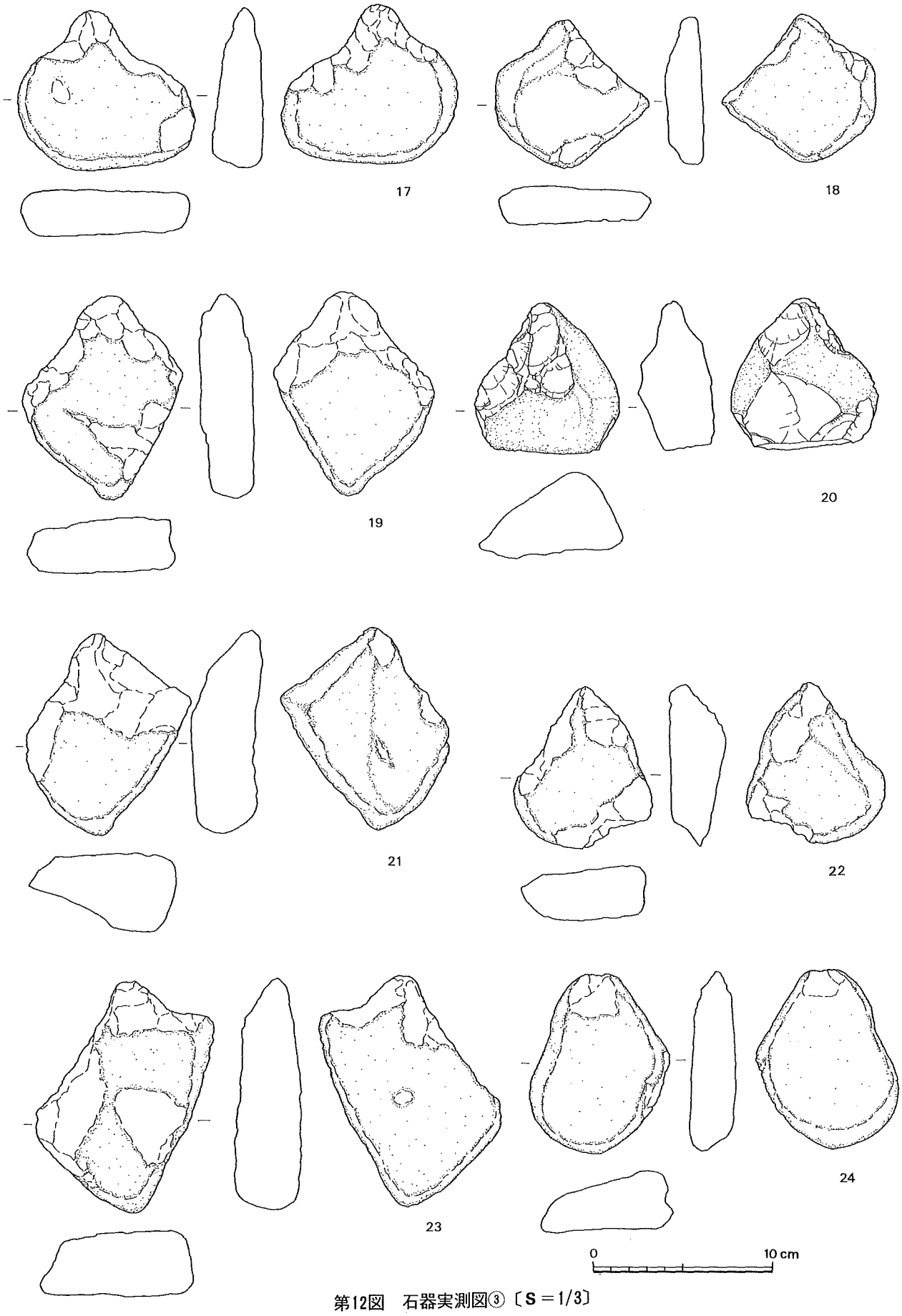
Ⅳａ型　（松藤Ⅲａ型）長軸中央部に尖頭部を作り出すもの。



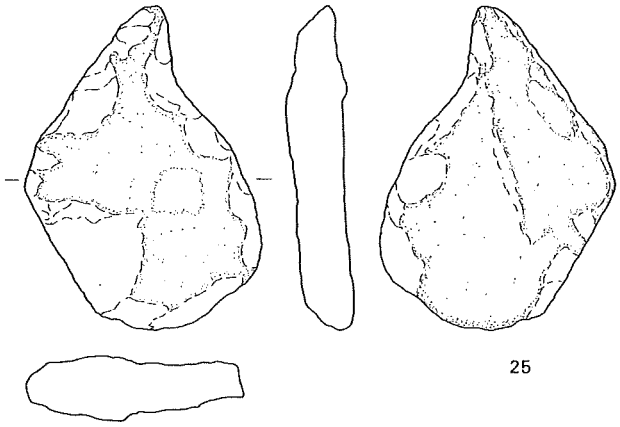

第10図　石器実測図①〔S＝1/3〕

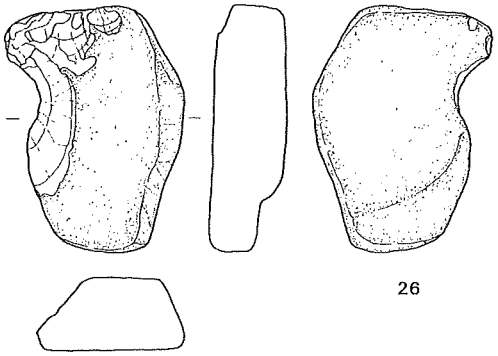


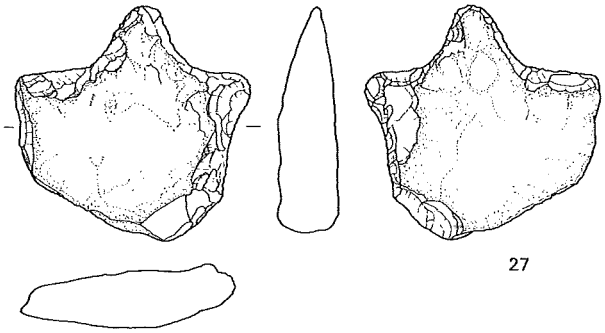

第11図　石器実測図②〔S＝1/3〕

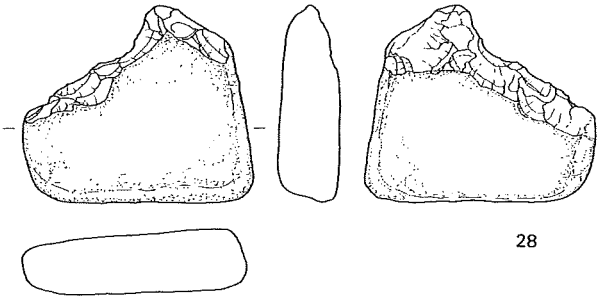


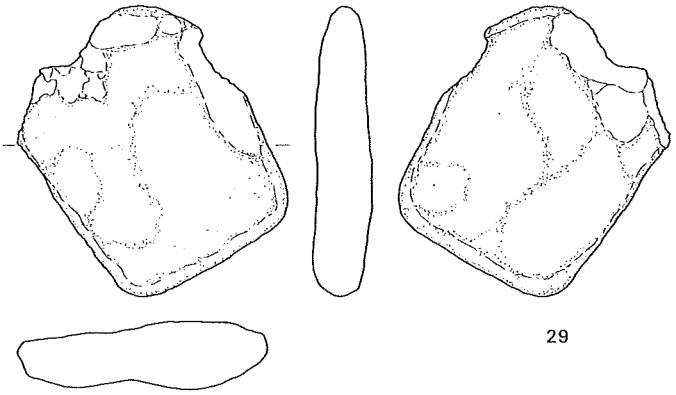

第12図　石器実測図③〔S＝1/3〕

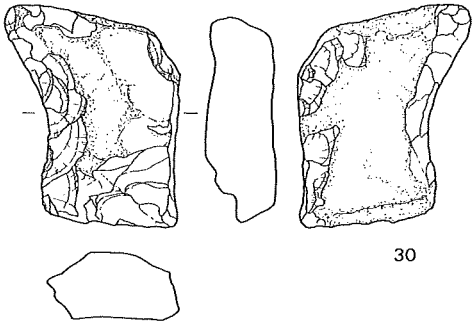


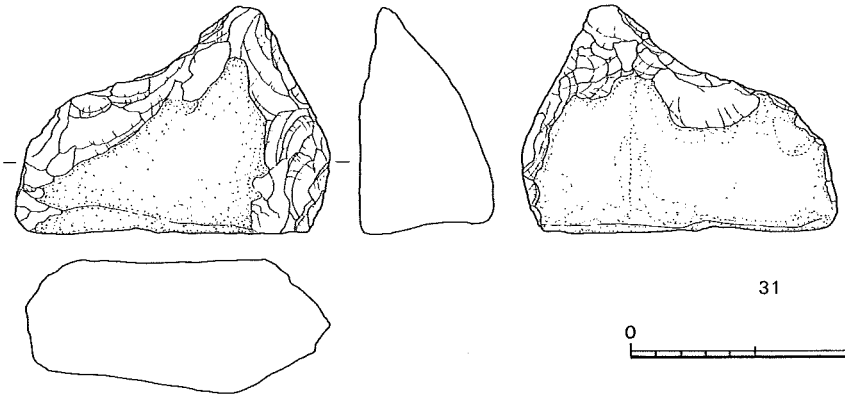



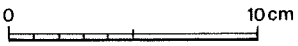



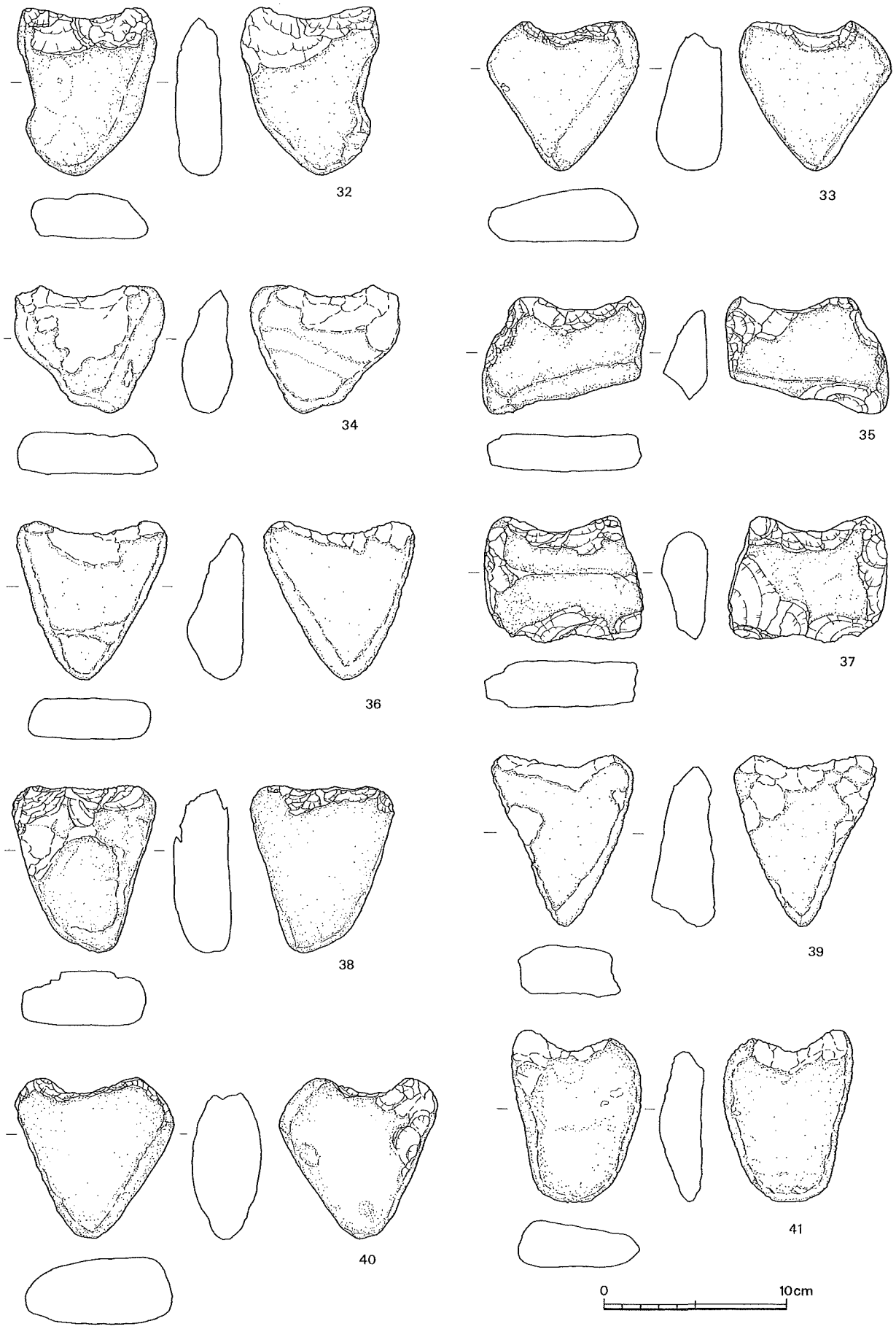




第13図　石器実測図④〔S＝1/3〕




第14図　石器実測図⑤〔S＝1/3〕

蒲河遺跡


［参考文献］

古田正隆1966『第一次口之津貝塚調査報告』口之津町教育委員会

賀川光夫1967『深堀遺跡』長崎県文化財調査報告書第５集

江坂輝彌1968「熊本県轟貝塚出土の打製靴型石器について」『日本民族と南島文化』
金関丈夫博士古稀記念委員会編　平凡社

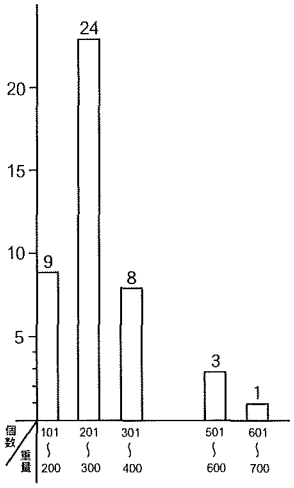
坂本経堯1971『天草の古代』

高野晋司1980「礫器について」『串島遺跡』長崎県文化財調査報告書第51集

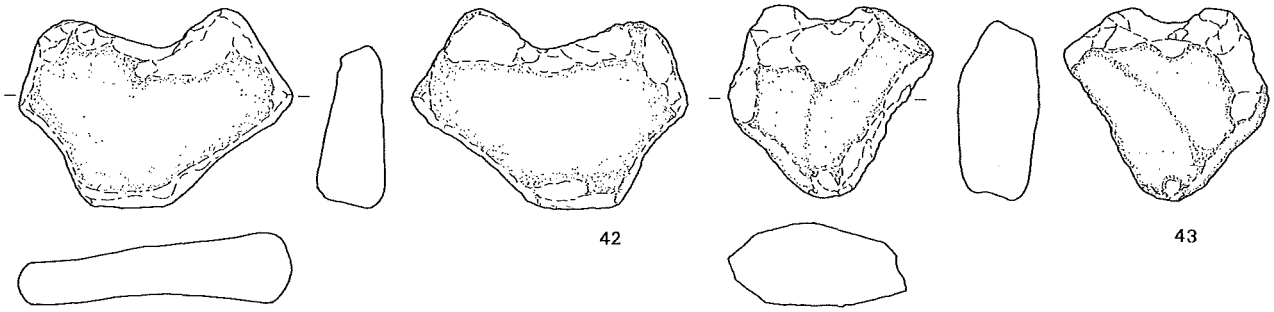
安楽勉1982「礫器」『堂崎遺跡』長崎県文化財調査報告書第58集

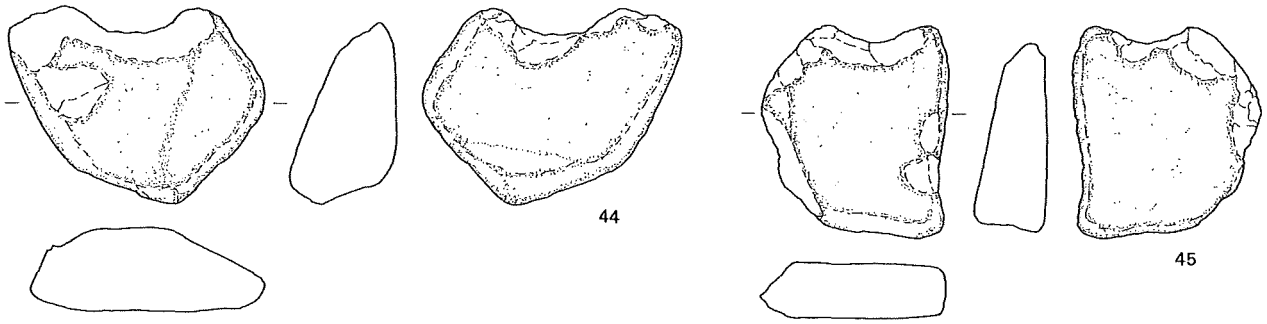
町田利幸1984「石器」『今福遺跡』Ⅰ　長崎県文化財調査報告書第68集

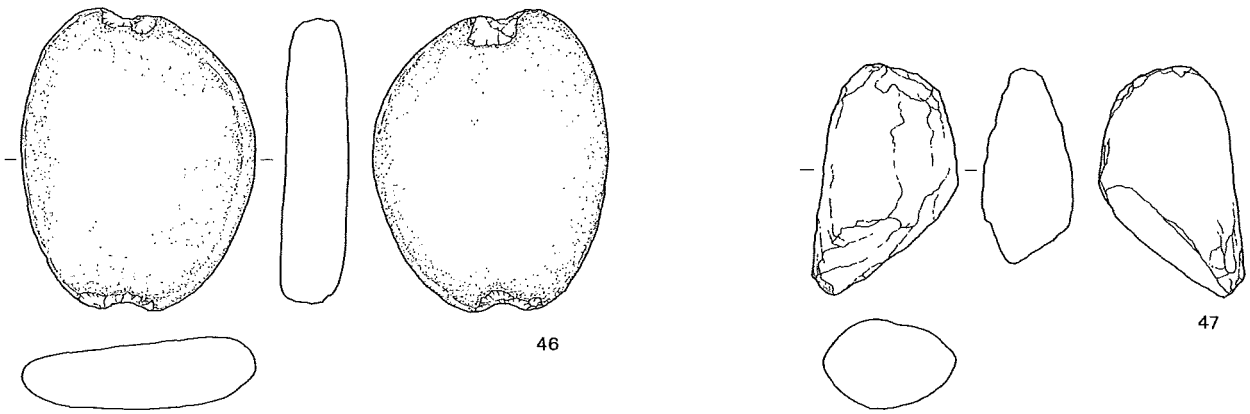
松藤和人1987「双角状石器小考」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズ


第２表　礫器の重量と個体数




0　10cm

第15図　石器実測図⑥〔S＝1/3〕

第３表　蒲河遺跡出土石器一覧表

| 図 | 番 | 松藤分類 | 石　質 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 10 | 1 | Ⅲc | 安山岩 | 10.7 | 9.1 | 2.9 | 341 | |
| | 2 | Ⅲc | 安山岩 | 8.8 | 8.2 | 3.3 | 272 | |
| | 3 | Ⅲa | 安山岩 | 7.2 | 9.5 | 2.6 | 255 | |
| | 4 | Ⅲc | 安山岩 | 8.8 | 9.3 | 2.6 | 241 | |
| | 5 | Ⅲ | 安山岩 | 9.6 | 9.6 | 3.0 | 302 | |
| | 6 | Ⅲc | 安山岩 | 8.3 | 8.4 | 2.6 | 195 | |
| | 7 | Ⅲc | 安山岩 | 9.6 | 10.3 | 5.3 | 540 | |
| | 8 | Ⅲc | 安山岩 | 7.5 | 8.5 | 3.0 | 207 | |
| 11 | 9 | Ⅲ | 安山岩 | 9.1 | 6.2 | 2.8 | 183 | |
| | 10 | Ⅲa | 安山岩 | 7.9 | 10.0 | 2.6 | 298 | |
| | 11 | Ⅲc | 安山岩 | 9.5 | 7.5 | 2.6 | 212 | |
| | 12 | Ⅲc | 安山岩 | 8.1 | 8.4 | 2.7 | 243 | |
| | 13 | Ⅲ | 安山岩 | 9.5 | 9.7 | 3.6 | 359 | |
| | 14 | Ⅲc | 安山岩 | 8.7 | 6.2 | 2.8 | 209 | |
| | 15 | ⅠorⅢ | 安山岩 | 12.1 | 9.7 | 4.1 | 530 | |
| | 16 | Ⅲc | 安山岩 | 10.4 | 5.8 | 2.6 | 213 | |
| 12 | 17 | Ⅲa | 安山岩 | 8.8 | 9.3 | 2.7 | 287 | |
| | 18 | Ⅲ | 安山岩 | 8.1 | 8.4 | 2.0 | 158 | |
| | 19 | Ⅲ | 安山岩 | 11.2 | 8.0 | 2.9 | 336 | |
| | 20 | Ⅲ | 安山岩 | 8.2 | 7.8 | 4.3 | 290 | |
| | 21 | Ⅲ | 安山岩 | 11.1 | 8.0 | 4.2 | 387 | |
| | 22 | Ⅲ | 安山岩 | 8.8 | 6.8 | 3.1 | 212 | |
| | 23 | Ⅲ | 安山岩 | 12.7 | 8.4 | 3.6 | 555 | |
| | 24 | Ⅲ | 安山岩 | 9.8 | 7.2 | 3.2 | 274 | |
| 13 | 25 | Ⅱa | 安山岩 | 12.8 | 8.6 | 2.5 | 288 | |
| | 26 | Ⅱa | 安山岩 | 9.7 | 5.8 | 2.9 | 253 | |
| | 27 | | 安山岩 | 8.9 | 8.5 | 2.4 | 210 | |
| | 28 | Ⅱa | 安山岩 | 7.8 | 8.8 | 2.4 | 234 | |
| | 29 | Ⅲ | 安山岩 | 11.5 | 9.8 | 2.7 | 358 | |
| | 30 | Ⅱa | 安山岩 | 8.1 | 5.1 | 2.7 | 198 | |
| | 31 | Ⅱa | 安山岩 | 9.0 | 12.1 | 5.3 | 690 | |
| 14 | 32 | Ⅰb | 安山岩 | 8.3 | 6.3 | 2.4 | 207 | |
| | 33 | Ⅰb | 安山岩 | 7.3 | 8.0 | 3.5 | 227 | |
| | 34 | Ⅰb | 安山岩 | 6.6 | 7.4 | 2.8 | 161 | |
| | 35 | Ⅰb | 安山岩 | 4.8 | 8.3 | 2.3 | 148 | |
| | 36 | Ⅰb | 安山岩 | 7.8 | 6.5 | 3.0 | 199 | |
| | 37 | Ⅰb | 安山岩 | 5.7 | 8.1 | 2.5 | 196 | |
| | 38 | Ⅰc | 安山岩 | 8.5 | 6.6 | 3.0 | 258 | |
| | 39 | Ⅰb | 安山岩 | 8.6 | 5.4 | 3.3 | 212 | |
| | 40 | Ⅰb | 安山岩 | 7.8 | 7.8 | 3.7 | 305 | |
| | 41 | Ⅰb | 安山岩 | 8.1 | 6.4 | 2.4 | 194 | |
| 15 | 42 | Ⅰb | 安山岩 | 6.5 | 10.9 | 2.8 | 275 | |
| | 43 | Ⅰb | 安山岩 | 7.2 | 7.1 | 3.2 | 226 | |
| | 44 | Ⅰb | 安山岩 | 7.2 | 9.3 | 3.8 | 316 | |
| | 45 | Ⅰb | 安山岩 | 7.5 | 7.4 | 2.8 | 245 | |
| | 46 | 石錘 | 砂　岩 | 11.3 | 9.3 | 2.6 | 415 | |
| | 47 | 石斧 | 蛇紋岩 | (7.9) | (5.3) | 3.6 | (195) | 刃部欠損 |

# V　まとめ

今回の調査の結果を簡単にまとめると以下のとおりである。

① 遺物は縄文時代晩期の土器から近世陶磁器に至るまで各時代の遺物が出土した。

② 遺物の数量は礫器を除くと各時代数点ずつで、合計でも約30点にすぎない。

③ 遺物はすべて第１層からの出土で、明確な包含層は確認できなかった。

④ 調査区およびその周辺で多量の礫器を採集できたが、近隣の堂崎遺跡では128点採集および出土した石錘は１点にすぎなかった。（註１）

⑤ 礫器の重量の平均は277ｇで比較的小型である。

⑥ 遺構・貝塚等は検出されなかった。

本遺跡の後背地は有家川扇状地で非常に緩やかな傾斜を持つ低地である。現状は主に水田や畑地として利用され、海岸部に大規模なスポーツ施設が作られている。この付近に所在する遺物包含地としては、縄文時代が白崎遺跡（**58**）、弥生・古墳時代が堤遺跡（**51**）、町村遺跡（**53**）、フケタ遺跡（**60**）がある。いずれも発掘調査は行われておらず詳細は不明であるが、島原湾に南面するこの地は、遺跡の立地環境としては適地であり、集落が形成された遺跡がある可能性は高いと思われる。今回の調査区の西側には小川が流れている。このため、礫器を除く遺物については扇状地に立地していた遺跡から小川を通じて運ばれてきたものと判断することが適当であろう。

本遺跡では縄文時代晩期の礫器が多量に採集される。礫器の使用方法についてはこれまで指摘されてきたとおり（註２）、尖頭状礫器についてはカキやアワビの捕獲用として、双角状礫器については調理用（註３）と思われる。礫器の構造は単純なものであり、熟練した人であればわずかな時間で製作が可能である。そのため捕獲や調理の際に必要に応じて製作し、作業が終わると放置したと考えられる。これらのことから本遺跡の性格については縄文時代晩期の貝類の捕獲地および加工地とみるのが適当であると思われる。

［註］

註１　地形的には類似している堂崎遺跡で多数みられる石錘がほとんどみられないのは不思議であるが「尖頭状礫器を多量出土する遺跡では石錘が少なく、尖頭状礫器の出土をみない後晩期遺跡では、多量の石錘を出す傾向がある。」（賀川1967）の指摘からすればむしろ堂崎遺跡の方が例外的である。

註２　賀川光夫・橘昌信1967『深堀遺跡』（長崎県文化財調査報告書第５集）長崎県教育委員会
山崎純夫1975「貝塚と貝類捕獲について」『九州考古学の諸問題』福岡考古学研究会
松藤和人1975「石器」『口之津貝塚及び口之津烽火遺跡調査報告』（百人委員会埋蔵文化財報告第５集）百人委員会
安楽勉1979「浜泊遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅱ』（長崎県文化財調査報告書第45集）長崎県教育委員会
高野晋司1980『串島遺跡』（長崎県文化財調査報告書第51集）長崎県教育委員会
安楽勉1982『堂崎遺跡』（長崎県文化財調査報告書第58集）長崎県教育委員会

註３　調理用とはカキ打ち的な用法や巻貝を生のまま取り出すために破砕することなど（高野1980）（安楽1982）が考えられる。

# 図　　版

調査区遠景

干潮時調査風景

満潮時調査風景

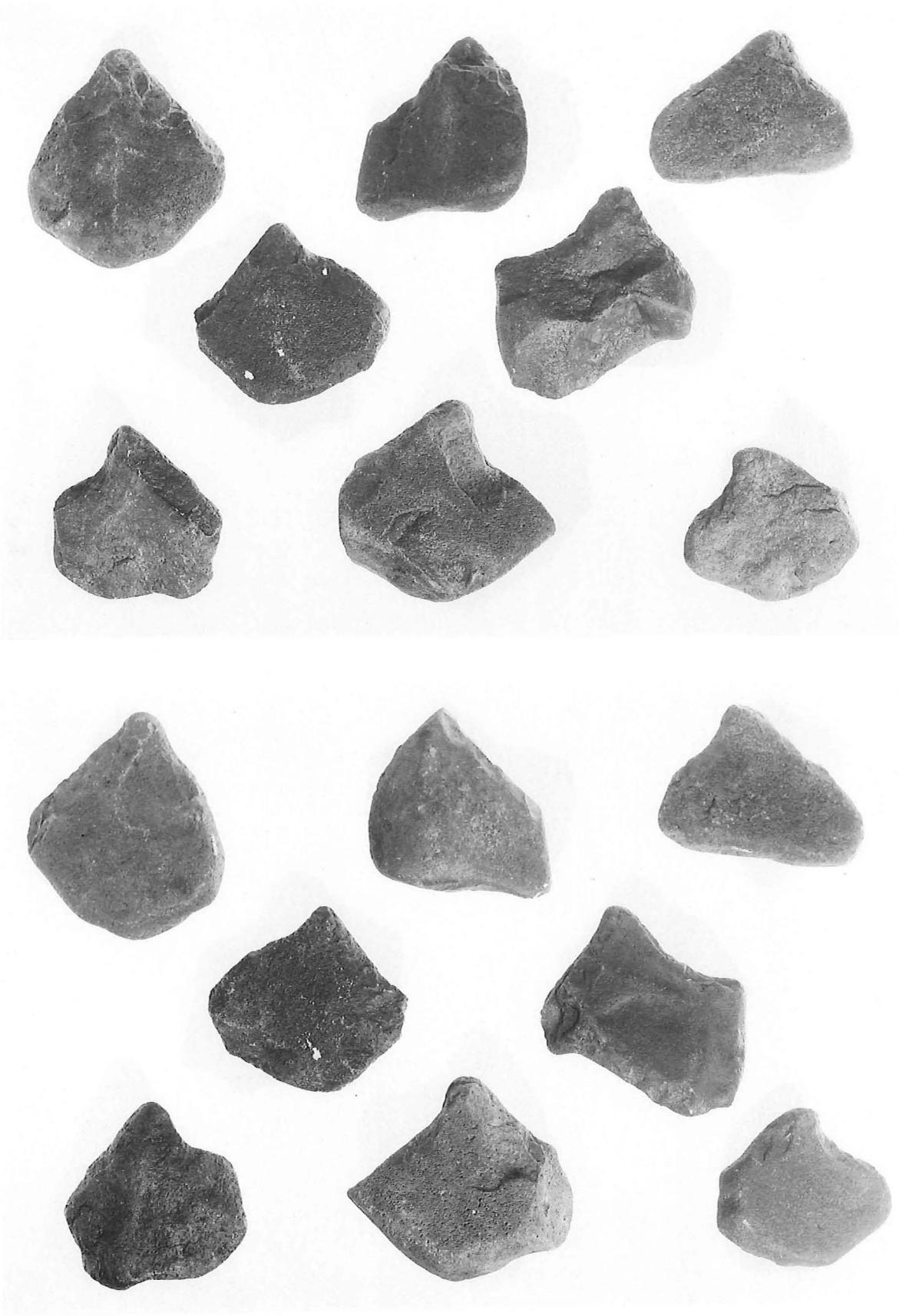
図版１　調査状況①

グリッド設定状況
（中央は潟島）

B－5グリッド土層断面

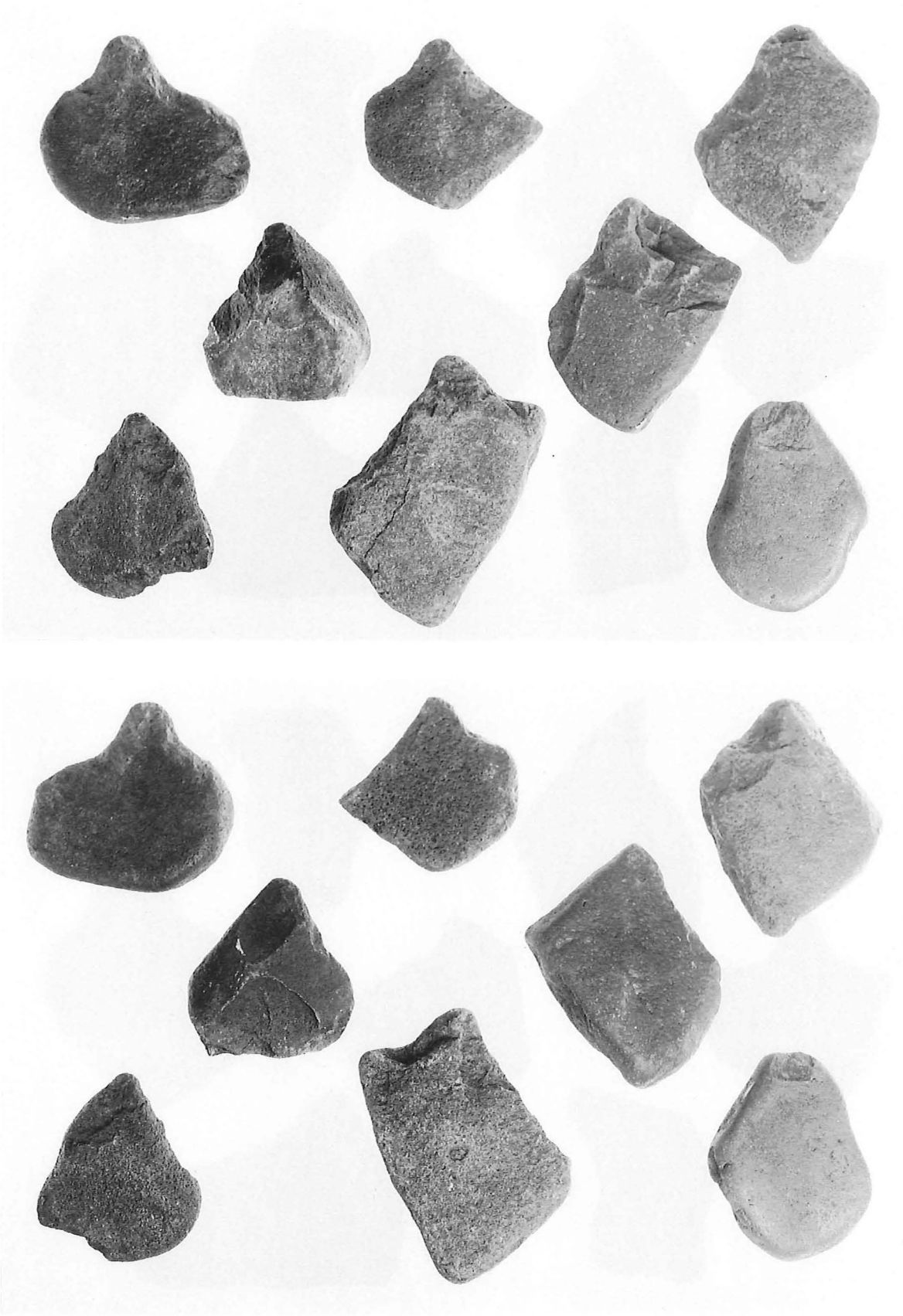
調査区面を流れる小川

**図版2　調査状況②**

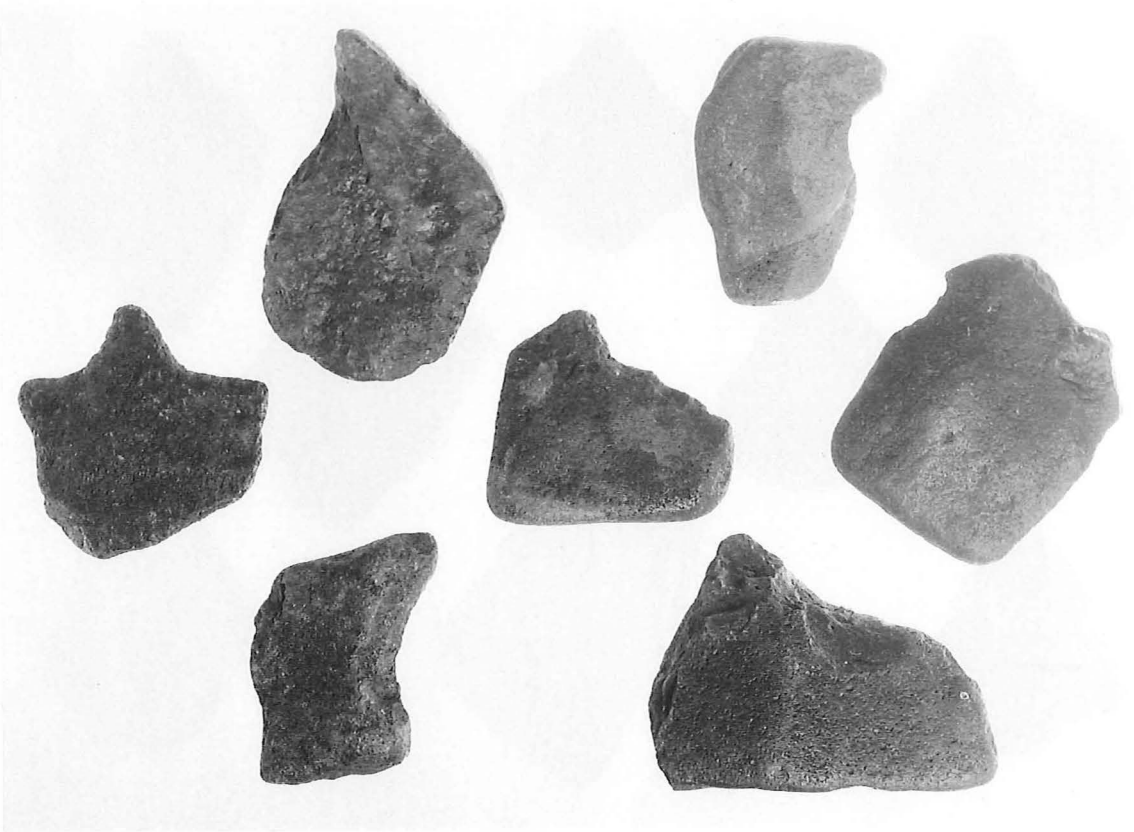


図版3　礫　　器（表・裏）

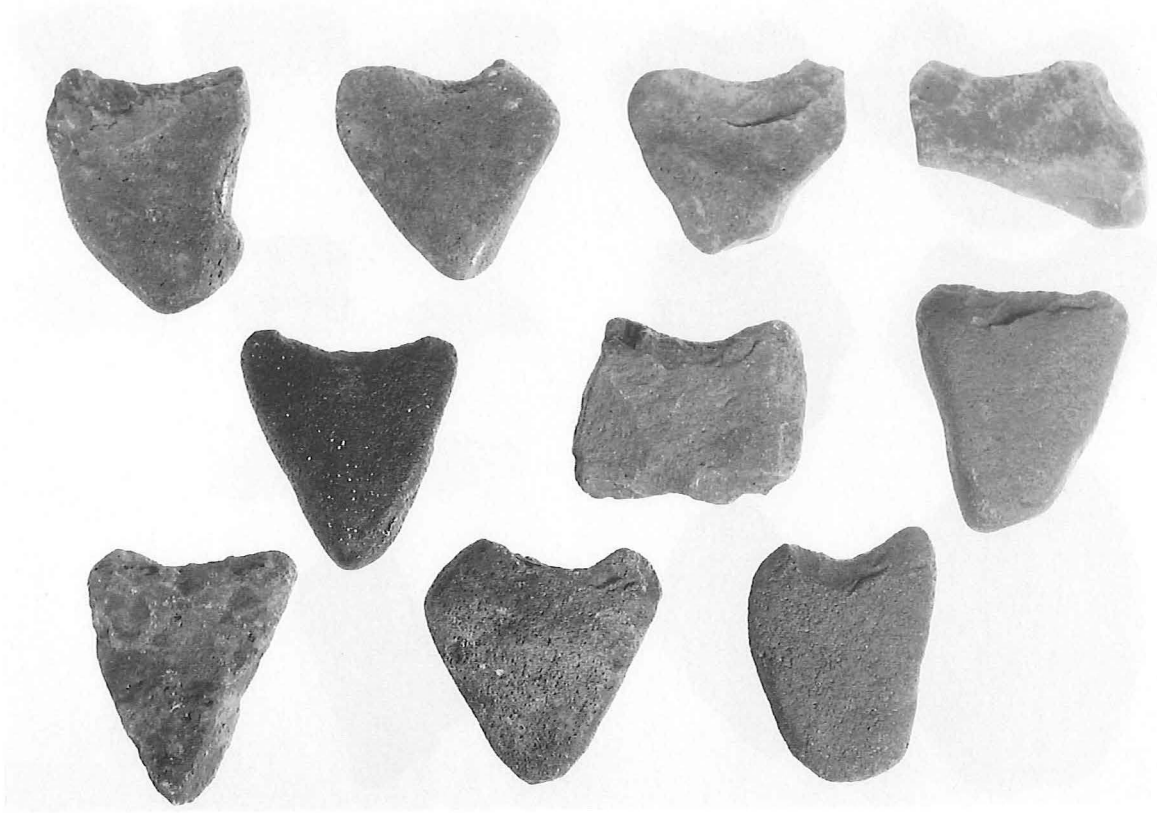
図版4　礫　　器（表・裏）



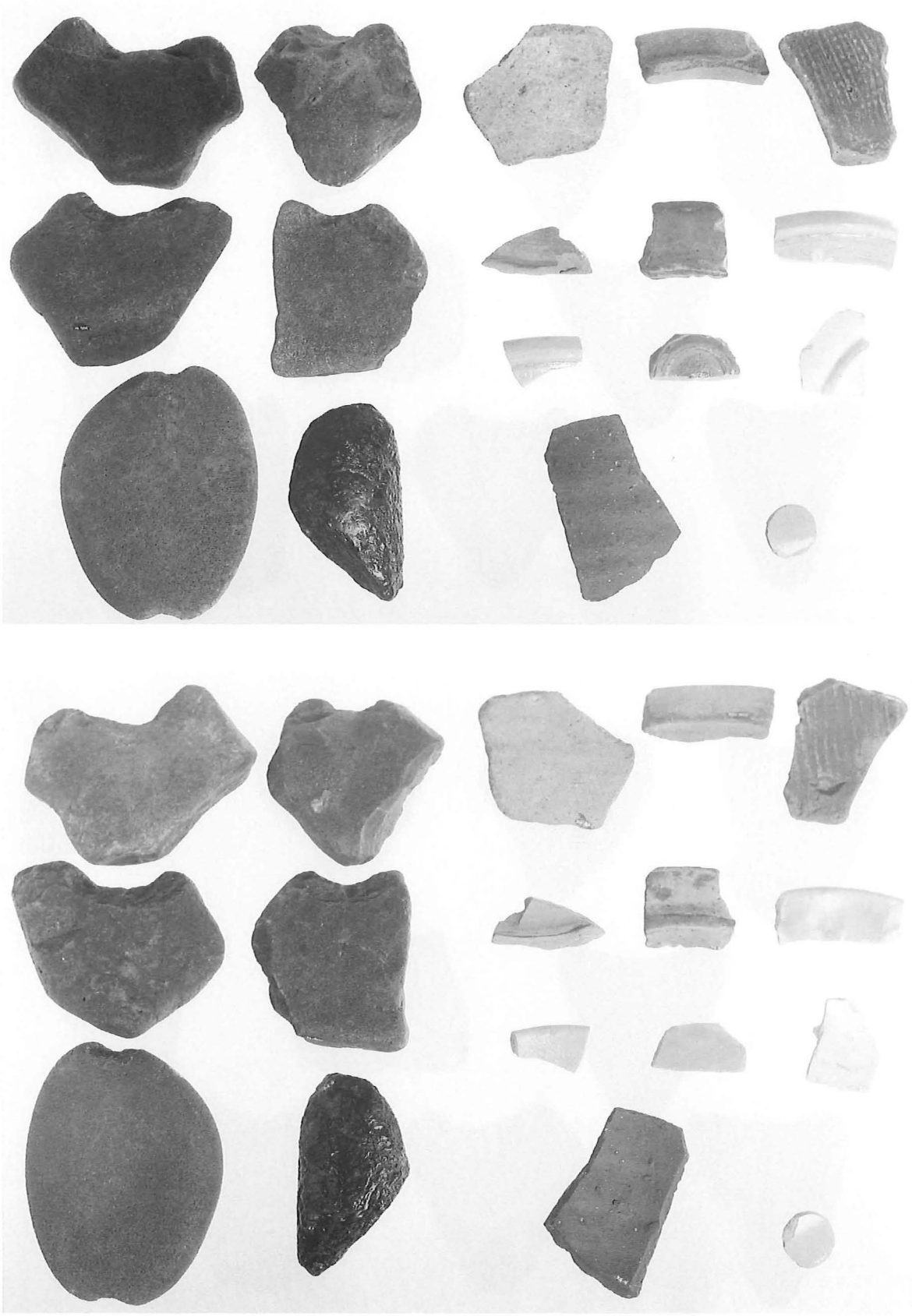
図版5　礫　　器（表・裏）



図版6　礫　　器（表・裏）



図版7　礫　　器（表・裏）



図版8　礫　　器，土器・陶磁器（表・裏）

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | かまがいせき |
| 書名 | 蒲河遺跡 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 長崎県文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第142集 |
| 編著者名 | 福田　一志・甲斐田　彰 |
| 編集機関 | 長崎県教育委員会 |
| 所在地 | 長崎県長崎市江戸町２番13号　TEL(095) 822-1111 |
| 発行年月日 | 西暦　1998年３月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積<br>(㎡) | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 蒲河遺跡<br>(がまがいせき) | 長崎県(ながさきけん)<br>南高来郡(みなみたかきぐん)<br>有家町(ありえちょう)<br>蒲河名(かまがみょう)ほか | 42374 | 062 | 32°<br>39′ | 130°<br>19′ | 19970506<br>～<br>19970604 | 100 | 保健センター建設工事 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 蒲河遺跡 | 遺物包含地 | 縄文時代晩期 | | 礫器 | |

長崎県文化財調査報告書第142集

蒲河遺跡

1998年3月31日

発行　長崎県教育委員会
長崎県長崎市江戸町2番13号
TEL　(095)824-1111

印刷　(有)三省堂印刷所
長崎市幸町4-28
TEL095-825-6171